**№46　テーマ『21世紀における日本人の使命』**

**講話日2007年7月30日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：まあ、梅雨も明けて、相当暑い日が続いておりますが、どうぞ皆さん、健康に気を付けて頑張ってください。今日のテーマは「21世紀における日本人の使命」ということで、まあ、これからですね、われわれが仕事をしていく場合の基本になる心構えのようなですね、まあ、そういうお話をさせてもらいたいと思います。で、まあ、仕事をする場合でもですね、こう生活するうえにおいても、人生ということを考えるうえにおいても、一番基本的にこの大事なのは、時の流れという、時流をつかむということがですね、非常に大事なこの課題になってきます。まあ、基本的には、時の流れに逆らえば、いかなる努力も報われることはないと。時の流れに乗れば、少ない努力で多くの成果を得ることができる。まあ、そういう意味で、この時流というものを理解し、時流に乗るということは非常に大事な、やはりこの課題だというふうにですね、考えなければなりません。これは仕事上においても、自分自身の生き方、人生を考えるうえにおいても、時流というものをつかんで、その時流に乗った生き方をする。流れに反しないということはですね、非常にこの大事な成功と幸せの原理だというふうに言うことができるわけであります。**

**ところが、まあ、今の時代というのはですね、この激動の時代というふうにいわれる、そういう状況の中にあって、まだ激動の時代は終わっておらないと。ということは、この激動というふうにいわれ始めたのは、1980年代に入ってからなんですけどもですね、いろんなその思わざる大きな出来事が世界に起こるという、そういう状況になってきました。まあ、これはベルリンの壁の崩壊とかですね、あるいは、米ソの冷戦が急速に収束して終わってしまって、米ソが協力し合うとかですね、まあ、そういうふうなことから始まって、またそのイスラム教の勢力が非常にこう大きくなってきてですね、それがこのアメリカとの対決という状況で、世界に脅威を与えるような、まあ、そういう状況になってくるとかですね、あるいは、朝鮮半島の問題とか、まあ、世界にこう広がっておる核兵器のですね、この問題なんかもそうですけど、1980年代ぐらいから、いろんなそういう世界的に大きな影響を持つような出来事がたくさん起こってきました。**

**そういうところから、まあ、世界は激動の時代に入ったというふうに、こういわれておって、もうその激動の時代に入ってから10年ぐらいのですね、10年以上の長い年対を経てるわけですけど、まだその激動は終わっておりません。で、その激動の原因はなんなのかということなんですけども、これはもうすでにですね、世界の学識者の中で一応の共通する見解ができておりまして、このレジュメにも書いてあるようにですね、激動の原因は２つありまして、１つは、この世界全体が西洋の時代から東洋の時代へと、その文明の中心を移し替えようとしておるというですね、まあ、そういうことで、西洋の時代が終わって、これからはアジアが燃えるという、そういう状況で世界史はつくられていくんだと。いつまでも欧米を中心としての、まあ、そういう見方をしておってはならない。これからは、アジアが発展することによって、世界が発展し、また歴史がつくられていく。その意味においては、アジアの動き、アジアから出てくる新しいこのものの見方、考え方、価値観、そういうものにもっともっとこの関心を持ってですね、見つめていくようにしていかなければならないと。**

**で、まあ、そういうことを考えると、今の世界というのはですね、西洋的価値観の崩壊、西洋的世界観の崩壊、西洋人のものの考え方が壁にぶち当たって、うまくいかなくなってきてるというね、まあ、そういう状態で、その象徴が欧米諸国とイスラム諸国との対決という状況の中でですね、このイスラム圏の諸国が非常に大きな力を自覚し始めてですね、そして、このそう簡単に欧米の意向に屈服しないというふうな、そういう状況になってきた。これもやっぱり、このアジアの時代というね、まあ、そういうふうな状況の中から出てきた新しい動きというふうに言ってもいいかと思います。で、アジアというとですね、一般的には、この日本から中国、インドまでぐらいをアジアというふうにこう思ってるという人が多いと思うんですけど、だけど、ヨーロッパ人の意識からいうとですね、アジアというのは、近東、中東、極東というふうな、３つのグループに分けて考えられるわけであって、西洋というね、そういう観点から、東洋という、東のほうというふうにいわれる、まあ、そういうこの領域というのは、まあ、だいたいそのイラン高原あたりからですね、中東地域、それから、この日本ぐらいまで、ずっとこれはアジアなんですね。だから、その意味では、中東というふうにね、こういわれる、そのイスラム圏というものもアジアの中に入ってきますので、そういう意味では、アジアの時代という、そういうことの中で、イスラム圏のこの力もですね、この世界に大きな影響を与えるような、まあ、そういう状況になってきてるというふうに、まあ、考えることができます。**

**そういうこともあって、どんどんとこの欧米のですね、世界に対する影響力というのは、まあ、低くなってきてる。その反対に、アジアの世界に対する影響力というのは次第に大きくなってきてる。まあ、そういうふうな流れなんですね。世界文明の中心が西洋から東洋へと移行し始めておる。まあ、そういう状況にあるっちゅうことですね。で、そういうこのちょうど西洋から東洋へと世界文明の中心が移動していく、その過渡期に今、あるというのがですね、世界の現状であります。で、これは、まあ、その激動の要因の中の外的要因といってですね、外の世界のこの環境の変化と言うことができるものですけど、第２番目のですね、この理性の時代から感性の時代へ。これは近代という時代がですね、理性の時代というふうにいわれて、このあらゆる事柄を理性に基づいて合理的に処理するというですね、まあ、そういうふうな仕方でいろんなことがなされてきました。ところが、この理性によっていろんなことをやってきた結果ですね、どういうことが起こったのかといったら、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物、まあ、そういうこの不安がつくられてきたというのがですね、結果としての現状であります。**

**まあ、そういうところから、この人類はですね、本当にわれわれは、理性を信じて、理性のみに頼って生きていってもいいのかという反省が出てきておる。これは、まあ、理性、理性の揺らぎというふうに言ったりですね、してますけども、まあ、いわゆる理性の絶対的に対する、理性への信頼というものが揺らぎ始めたというのが今日の状況なんですよね。そういうところからですね、時代はこの理性というものが、本当にこう信頼できるものではない。理性に頼って生きることが、この決してその人間にとって安心できるような、そういう状況をつくらないというね、まあ、そういうところからですね、じゃあ、何を信じて生きていったらよいのかという、まあ、そういうこのことになってですね、その結果として、多くの人々が理屈じゃない、心が欲しいというね。理屈じゃない、心が欲しい。まあ、そういうこの心を求める。心を満たすものを求める。あるいは、この感性というですね、まあ、そういうこの領域にある感情とか、本能とか、欲求とかですね、まあ、そういうものをこう大事にして生きるような、まあ、そういうこの意識がですね、芽生えてきてるというのが、まあ、今日の状況であって、それを、まあ、精神的に言うと、理性の時代から感性の時代へという、まあ、そういう流れになってくるわけですね。その理性の時代から感性の時代へという流れを端的に表現する言葉が、理屈じゃない、心が欲しいという叫びであります。**

**で、これは、まあ、全世界的にいって、現在は感性というものを大事にする。あるいは、心を満たすものを求める。心の癒やしを求める。まあ、そういうふうなこの欲求が非常にこう強くなってきておる。全世界的にいって、心のストレスをどう取り除くかというね、まあ、そういうふうな癒やしの産業というものが非常にたくさん出てきております。そういう意味では、住宅というものもですね、一種、人間の憩いの場という、そういうことを考えるならばですね、住宅もこのある意味で、命を休める、癒やしというものをですね、その住宅思想というものの中に含めて考えなければならない。住宅づくりの中に、その家の中におることが、心が安まる、心が癒やされる。そういうふうなこともですね、これから住宅が持っておる機能、役割の中で考えていかなければならないという、まあ、そういうこのことになってくると思います。まあ、実際、皆さん方も家に帰ればほっとするとかね、そういうことがあってですね、帰るところがないということほど不安で、この、まあ、なんちゅうんですかね、心が満たされないことはない。帰るところがないっちゅうことは、非常にさみしいことであってですね、やっぱり家に帰るということは、そういう意味では、ある意味で癒やし、安らぎという、そういうものがあるので、そういう住宅というものの中にね、そういう本当の癒やし、安らぎというものを表現するようなね、まあ、そういうふうな住宅づくり。住宅がその家の中に住む人間の心を癒やす。まあ、そういうこともですね、これから考えていかなければならないということも、家づくりのテーマだと思うんですよね。どういうテーマで家をつくるかということの、非常にこれは大事なことです。**

**昔は、家というものを非常に機能的なですね、便利なものというような、そういう感じでこの部屋のあり方とかですね、家の構造というのを考えたわけですけど、最近はそういうことだけじゃなくって、家の中に入ると気分がいいとかですね、そういうことで吹き抜けのこの玄関をつくったりね、いろんなことで天井を高くしたりとか、いろんなことでそういうこう気持ち、心を癒やす、安らぐというふうな、そういうものをテーマとした家の構造とか、いろんなその家の中の調度の具合とかというようなものも考えるようになってきてると思うんですけど、それが、まあ、癒やしというね、まあ、そういうことにこうなってきます。それも理屈じゃない。心が欲しいというね、そういう叫びに対応する、この住宅のあり方の変化というふうに言うこともできると思うんですね。まあ、とにかくこの外の世界は、西洋から東洋へという流れですけども、この内的世界、精神世界は、理性から感性へというね、まあ、そういうこの精神原理上の変化というものが、今、全世界的に進んでおるということですね。**

**これは、このアメリカなんかでもそうですけど、ロシアなんかでもそうですけど、超能力者というか、霊能力を持った人を犯罪捜査に使ってですね、そして、霊能力者にいろいろこう見てもらったり、占ってもらったりしながら、犯罪捜査が進んでいくという状況ですし、また、その霊能力者をどういうふうに軍事的に利用できるかというようなこともですね、考えておったりなんかして、理屈じゃない、この感性から出てくる能力というものをですね、どういうふうにこの伸ばしていくか、使っていくかということを、その、まあ、戦略的な観点から研究しているというような、そういうこともなされておりますのでですね、ますますそういう意味では、感性という、これまで予想もしなかったような新しい精神能力というものが、どんどんとこの開発されていくような、まあ、そういう状況になってきております。だけど、日常的なですね、われわれのこの意識からすれば、感性といえば心、心が感じるものですので、そういう意味では心を大事にする。理屈よりも心を大事にするということがですね、非常にこの重要な課題だということになってきます。**

**だけど、会社でも、家庭でも、ほとんどの人間関係がですね、理屈でこの処理されておるということが現実であって、夫婦関係もお互いに理屈を言い合い、親子の関係も理屈で言って聞かせるということになったりですね、会社の中でもその理屈でお互いの仕事が進んでいくような、まあ、そういう状況で、なかなかその心を満足させるとかですね、心に訴えるような、まあ、そういうこの人間の対応の仕方というのは、ついつい後回しにされてしまって、合理的、あるいは理屈で物事を伝えて、理屈で説得して、理屈さえ通れば、心の問題はもうどうでもいいというふうな、まあ、そういう状態で会社やなんかでも仕事が進んでおる。相手の感情を害してもですね、理屈さえ通れば、それはしょうがないというような、そういう感じの対応の仕方をしてしまってる人も多い。相手の心、感情というものをあまり考えないでですね、その理屈を言って、その物事を処理してしまうというふうな、まあ、そういうこの状態で仕事が進み、会社の人間関係が進んでおるということが非常に多いわけですよね。で、これはどうしてもこう、時間的にですね、あまり心遣いとかなんかしてると、時間的にこう余裕がなくってですね、この能率が悪いということもあって、ついついこの表面的な、理屈だけでぱっと処理してしまうようなことになってくるわけですけど、それがこの人間関係というものがうまくいかなくって、会社を辞めてしまったりですね、あるいは会社の中に敵対する関係が生まれてきたりということの原因になりますので、そういう意味では、これからのですね、企業というのは、人間中心の企業というものをつくっていかなければならない。そのことを考えるとですね、会社という組織が仕事の結び付きや、理性的な、合理的な結び付きで、人間関係がこうつながっているということじゃなくって、これからの人間中心の企業、人間中心の経済というのは、心のつながりというものを根底に据えながらですね、組織というものは動くという状態にしていかなければならない。まあ、そういうふうにもこういわれておるわけであります。そういうこともやはり、この理性の時代から感性の時代へと世の中が動いておるということの一つの現象、あるいは証明、証左というふうにですね、言うことができるのではないかと思うんですね。**

**とにかく、経済全体がですね、この資本主義経済から人間中心の経済へと変わっていかなければならない。金の犠牲になるという、そういう状態からですね、その経済は人間のためにあるんだという、そういうふうな意識でですね、経済活動をすることによって、人間が鍛えられ、人間が成長し、心が、血の通った温かな心という、豊かさを持ってくるというふうなですね、まあ、そういうふうな状態に経済のあり方を変えていかなければならない。今日の経済は、経済活動をすることによってですね、人間性が破壊され、血の通った温かな心がなくなってしまって、ぎすぎすして、お互いにその何かこう対立というものをね、感じるような、まあ、そういうこの非常に温かみのない、冷たい人間関係ができてしまいやすいような、まあ、そういう状況が資本主義経済の中にはあります。まあ、その意味で、理性的な関わりというものを中心にする資本主義経済からですね、心の結び付き、血の通った温かな心というものをお互いにこう交わし合い、大事にし合うような、まあ、そういうこの人間関係が生まれてくる、感性の時代へと変わっていく。そういう流れに今日はあるんだというふうに、まあ、考える必要があります。**

**まあ、そういうことを踏んで、この精神原理上の転換として、理性から感性へという大きなですね、転換が今、進んでおるっちゅうことですね。理屈も大事なんですけど、理屈よりも心を大事にする。感情を大事にする。あるいは、欲求を大事にする。命から湧いてくるものを大事にする。命から湧いてくる欲求、欲望、興味、関心、好奇心というね、まあ、そういうものを大事にするという、まあ、そういうふうな意識というものがですね、これからは要求されてくるということですね。まあ、よくモチベーションというようなことをよく言いますよね。仕事をするうえでは、モチベーションを高めなければならない。モチベーションというのは、やる気ということなんですけど、やる気ということは、この自分の仕事に対して、興味や関心や好奇心を持つ。そういうこの興味、関心が湧いてくるというね、まあ、そういうこの理屈抜きに命から湧いてくるというものがないと、モチベーションは高まりません。理性でやる気にさせようと思っても、それは強制的にですね、その、まあ、動かされてるという状況なので、命から理屈抜きに興味、関心、好奇心という、そういうものがこう湧いてきて、初めて人間は自然に体が動くというか、自然にものを求めていく。やりたいという、そういう気持ちになってくるっちゅうことになりますので、そういう意味でも、そういうこの感性から湧いてくる欲求、興味、関心、好奇心、そういうものが非常に大事だということですよね。**

**意味を感じるとか、価値を感じるとかね、感謝も感じるもんだしね、愛も感じるもんだし、感動も感じるもんだし、そういう感じるということがないと、人間の命というのは自然に動かないんだ。理性でその教えてですね、理性で説得してわからせてということをやってると、それは強制的にですね、この肉体を動かせられるような、まあ、そういう状況にこうなっていってしまうもんですから、そのことによって、つらさ、苦しさ、窮屈さを感じるようなことになってきます。そういうモチベーションという観点からもですね、これからは感性というものを大事にしなければならない。理屈で言って聞かせて、やらせようというのは強制だと。自然にこのモチベーションが高まってですね、やる気になってくるということは、命から理屈抜きに興味、関心が湧いてくるというような、そういう状況にならないといけないわけなのでね。まあ、そういうふうな状態の自分というものをこうつくっていこうと思ったら、感性を大事にする。まあ、そういうこの意識変革がですね、これから要求されてくるというふうに、まあ、言うことができます。**

**なんでですね、その理性の次は感性ということになってくるのか。なんでこれからは感性が大事なのか。なんでこれから心が大事なのかという、その理由もちゃんとこうわかっていなければならないんですけど、この近代は理性の時代というふうにいわれましたよね。近代は理性の時代である。だから、理性を原理にしていろんなことをやってきた。学校でも、学校の教育というのはですね、理性を成長させる、その教科ばかりがあってですね、心を成長させる教科というのはまったく今日でもあまり存在しません。いわゆる知育偏重といってですね、理性を成長させるための教育ばかり受けてきました。それがために、心遣いが苦手。血の通った温かな心を遣うということはどういうことなのかということがわからないというね、まあ、そういうふうなこの状態の人間がたくさんつくられてきました。まあ、それが理性の時代の教育なんですけど、そういうこの、なんでですね、近代という時代が理性という精神原理を根底に据えながら、いろんなことがなされていく。あらゆることが理性的、合理的に処理されるという、そういう状況になんでなってしまったのか。なんで近代は理性の時代ということになってしまったのか。その根拠、理由がですね、中世という時代の中にその根拠があるわけですよね。**

**中世という時代というのはどういう時代かといったら、中世というのは、まあ、宗教とか、信仰とかっていわれるような、そういうこの文化が人類を支配した、まあ、そういう時代だったわけですね。で、宗教とか信仰とかっていわれるような、非合理で不合理な力によって人間が支配されて、抑圧されるとですね、人間の命の中に眠っておる合理への要求が目覚めてくるという構造ができるんですね。いわゆる、まあ、心理学的に言ってもですね、その理屈に合わんことを言われると、理屈を言って反抗したくなってしまうという、まあ、そういうこの構造が命にできてきてしまうんですけど、そういうこの理屈に合わんことを言われると、理屈を言って反抗したくなってしまうというふうな、そういうこの人間のこの心のですね、構造というものが、歴史の中で展開されたのが、中世から近代に至るプロセスだというふうにですね、言うことができます。中世の時代というのは、非合理で不合理な力によって人間が支配され、抑圧されておった。であるが故に、この人間の命の構造としてですね、その不合理な力で支配されることによって、合理への要求が目覚めてくるという、まあ、そういう状況で近代は理性の時代になってしまったというふうに言うことができるわけですね。まあ、そういうところから、人類は人間の本質は理性だという、まあ、そういうふうに考えてですね、理性を成長させたならば人間は成長する。まあ、そういうふうに判断して、人間の本質は理性だ。だから、理性を成長させたら人間は成長するんだ。理性を成長させたら人間は幸せになるんだ。そういうふうに考えて、知育偏重のですね、理性を成長させるための教育というものがですね、近代においてつくられて発展してきたわけであります。で、その結果として何が起こったのかといったらですね、この心の喪失、人間性の喪失、人間性の破壊、まあ、そういうふうにこう言われるような、そういう状況が出てきてしまった。まあ、それがために、多くの学生がですね、勉強が嫌いになって、ぐれてしまって、犯罪や非行をこの起こすような、まあ、そういうこの状態になっていく。これが心の崩壊、人間性の崩壊というふうにいわれるような、まあ、そういうこの事柄の、まあ、現象というかですね、人間性が破壊され、心の喪失という状態が生まれてくることが、まあ、非行とか、犯罪の多発というふうな、そういう状況になってくるわけですよね。そして、その心が破壊されることによってですね、閉じこもり、不登校、まあ、自閉症、まあ、そういうふうなこの状況に陥って、子どもたちが不幸なね、青春時代を歩まなければならない。まあ、そういうことにこうなってしまったわけですね。まあ、これが理性というものをですね、成長させるためになされた教育によってつくられてしまった、この弊害というかですね、この悪い結果であります。**

**まあ、そういうところからなんとかしなければならないということで、今、いろんなことがなされているわけですけども、だけども、それをこのどういうふうなかたちで、その問題を乗り越えたらよいのかということを考えるとですね、この近代は理性の時代といわれて、理性的な、まあ、そういうこの能力を原理にしていろんなことがなされてきた。まあ、それがために、われわれは理性的に考えて正しいことをしなければならないと思ってですね、このいろんなことをやってきたんですけども、そのことによって人間が理性に支配されてですね、人間が理性化されてしまって、そして、その窮屈で堅苦しいですね、つらい、苦しい人生を生きなければならないという、そういう状況になってきた。で、その中からですね、理性に支配されて、合理的なその考え方に人間が支配されてしまう。まあ、そういう状況が長く続くことによってですね、人間の命の中からですね、その合理的ではない、非理性的、非合理的な力が目覚めてくるという構造がつくられるわけですね。ちょうど中世の時代においてですね、不合理な力によって支配されることによって合理への要求が目覚めてくるという、そういう状況と同じように、合理的で、理性的な力に支配されることによって、人間の命の中に眠っておった、非理性的、非合理的な力が目覚めてくるという、まあ、そういう構造ができてしまった。その結果として、今、多くの人たちがですね、心が欲しいという叫びを上げておる。ようやく非合理的、非理性的な力が目覚めてきて、そして、その理性ではない、心こそ人間の本質なんだとこういわれるような、そういう時代になってきてるということですね。まあ、そういう流れで、これからの時代はですね、感性の時代であり、心の時代だというふうにいわれるわけであります。**

**だけど、まだ学校ではですね、心を成長させるとか、あるいは、感性を大事にするとかというような、そういう教育は、ほとんどなされていない。だから、多くの子どもたちは、本当に心を大事にして、感性を成長させるということをしてもらいたいのにですね、学校じゃ、それをしてくれない。だから、多くの子どもたちが学校から離れていってしまうような、そういう状況が出てきておるわけであります。まあ、そういうことを考えてもですね、その今の時代というのは、心を大事にし、感性を大事にするという、まあ、そういうことをしていかないと、多くの人間に本当の満足、幸せというものを与えていくことができない。そういう時代なんだというふうにですね、考えなければなりません。心を大事にするっちゅうことはどういうことなのかということなんですけどもですね、これはその、まあ、基本的にはですね、相手の悲しみを感じてあげる。相手が悲しんでおっても、そんなことぐらいはなんでもないやないかって、理屈でですね、その慰めたり、説得したりするんじゃなくって、相手が悲しんでおったならばですね、その悲しみを共感同悲といって、相手の悲しみをわが悲しみとして感じて、そうだよな、悲しいよな。そうだよな、つらいよなとこう言ってあげるというですね、それがこの心のつながり、心の結び付き、心を交流させるというですね、まあ、そういう方法であって、それが心を大事にするということなんですね。**

**で、理性で考えると、そんなことぐらいなんでもないやないかと言ってしまうのがですね、理性のこの言うことで、頑張れ、頑張れというのは理性なんですけど、だけども、感性、心というのは、悲しいときには、そうだよな、悲しいよな。つらいときには、そうだよな、つらいよな。苦しいときには、そうだよな、苦しいよなと言ってあげるのが、この共感同苦、共感同悲という、心をお互いにこの交流し合うというですね、そういうふうなこのことなんですよね。そういうふうに心をわかってもらう、そういうことからですね、人間のこのつながりというものが理屈を越えたものになっていってですね、理屈を越えたつながりが生まれてくると、理屈で対立しなくなってしまって、心のつながりができてくると理屈はどうでもいいという、そういうことになってですね、そして、そのお互いに兄弟のような、あるいは友達のような、まあ、そういうこの関係性で、理屈は違っておっても、協力してやっていこうというふうな、まあ、そういう心温かなですね、人間関係ができていくことになってくる。まあ、そういうのがですね、その心の時代、感性の時代というもののですね、基本的な対応の仕方であります。**

**で、これはまだまだ、その学校の教育の中では教えられていないことなのでですね、なかなか対応の仕方というものが難しいかもしれませんけども、もう少し、それをこう詳しく申し上げるとですね、どういうことになってくるかといったらですね、普通、うそを言うとですね、うそを言うたらいかんやないかというふうに注意するのが当たり前だと思ってますけど、これが理性なんですよね。それを心とか、感性を大事にするという、そういう観点からね、心を大事にするということを、まあ、優先させるとどうなるかといったらですね、このうそを言うということを、この人間はするということは、非常にこれはですね、自分の中で自己矛盾を起こしてることなので、うそを言う人間の心の中は非常につらいし、非常に苦しいというね、悩むという、そういう状態がこうあるわけなんですよね。そのときにですね、うそを言った人間に、うそを言うたらいかんやないかとこう言ってしまうとですね、そうすると、そう言われた人間はどうなるかといったらですね、その心の中ではうそを言うたらいかんことぐらいわかっとるわと。なんで俺がうそを言わなきゃならんような状況に陥って苦しんでおる、そのつらさがわかってくれないのという、そういうこの、まあ、気持ちがこう湧いてくるわけですよね。**

**そうすると、その、まあ、これが子どもの場合だったらどうなるかといったらですね、子どもがうそを言ったときに、お父さん、お母さんが、うそを言っちゃ駄目じゃないかと言うと、子どもの中では、うそを言うたらいかんことはわかっとるわ。なんでお父さん、お母さん、俺がうそを言わなきゃならんような状況で苦しんでんのに、このつらさがわかってくれへんのっちゅうことになってきてですね、もうお父さん、お母さんなんか、俺のことを全然わかってない。もうお父さんなんかに何を言うても無駄やということになってしまってですね、だんだん子どもは親に対するその、まあ、信頼をですね、なくしていってですね、親子のあいだの心のつながりが消えてしまうことになってしまうんですね。そのときに、そのうそを言ったらいかんやないかという理屈で対応するんじゃなくってですね、どういうふうに対応することが心なのかといったらですね、その子どもがうそを言ったときですね、なんでその子どもがうそを言わなきゃならんような状況に陥って、つらい、苦しい思いをしておるのに、親なのに、なんでそのつらさに早く気が付いてあげられなかったんだろうと考えてですね、うそを言った子どもを抱きしめて、そんなに苦しかったのになんでそのつらさをわかってあげられなかったんだろうね。ごめんね、許してねと言ってですね、子どもをこう抱きしめる。すると、子どもとしてはですね、ああ、やっぱり、お父さん、お母さんや。俺のつらさがわかってくれてると思ってですね、初めて親の愛が自分の命に染み込んでくる。そのときに心のつながり、親子のあいだのですね、血縁という関係性に基づく理屈を越えた心のつながりがそこでできるんですよね。**

**うそを言っちゃ駄目じゃないかと言ってる、その言葉は理性ですから、その言葉では心は断ち切られてしまってですね、親子のあいだの心のつながりは消えてしまうんですよ。だけども、理性で対応しないで、心で対応してですね、なんでそんなに苦しんでおったのに、早く親なのにその苦しさに気が付いてあげられなかったんでしょうね。ごめんね、許してねと言ってですね、うそを言った子どもを抱きしめる。そして、涙を流す。すると、子どもは、ああ、やっぱり、お父さん、お母さんや。俺のつらさをわかってくれてる。ありがたい、うれしいと思ってですね、血縁という理屈を越えた親の愛が自分の命に染み込んでくる。これが血の通った温かな心を持った親の態度なんですよ。うそを言っちゃ駄目じゃないかという、この言葉を発する親には、血の通った温かな心はありません。そこには理性、冷たい、冷ややかな理性しかないんですよ。だから、子どもはだんだんと心が冷たくなっていってですね、親が信じられなくなっていって、親にものを言わなくなってしまう。これがですね、理屈で対応するということと、この心を優先させて、心、感性を優先させるということの大きな違いです。**

**だけどもですね、うそを言った子どもに、ごめんね、許してねなんていうようなことを言っちゃったりなんかしてですね、抱きしめて、涙を流して、それだけではですね、これは子どもを甘やかせ、子どもを堕落させてしまう、この愛になってしまう。人間的な愛というものをこのつくろうと思ったならばですね、まずはそのうそを言った子どもを抱きしめて、ごめんね、許してねと抱きしめて、涙を流さなきゃならんですけど、その次にですね、どう言うかっちゅったら、だけど、やっぱり、うそは言っちゃ駄目なのよと言わなきゃならないんですよ。だけど、最初にうそを言っちゃ駄目なのよと言ったら、心のつながりは切れるんですよ。最初は、相手の悲しみ、苦しみ、つらさをわかってあげるというね、心の交流、心の結び付きをまずつくるっちゅうことが人間関係の基本なんですね。それがこれから、われわれは覚えていかなければならないですね、会社内部での人間関係の基本であります。まず理屈でいったら、人間関係は断ち切られてしまって、対立が生まれてくる。まずは相手のつらさ、苦しさをわかってあげる。だけど、それだけでは甘やかしだと。その次には、やっぱり理性を使ってですね、だけど、やっぱり、うそは言っちゃ駄目なのよと言わなければならない。**

**そして、人間らしい心を育てようと思ったらですね、うそを言っちゃ駄目なのよと、そこで終わってしまったら、これまた理性ですからね。本当に人間らしい心をつくっていこうと思ったら、その次にさらにどう言うかっちゅったらですね、今度うそを言わなきゃならんような状況に陥って、つらい、苦しい状況になったら、自分一人でこの苦しまないで、必ずお父さん、お母さんに相談してね、そしたら、お父さん、お母さんは、君一人につらい思いをさせないから、親子じゃないかと。その苦しみをお父さん、お母さんも一緒に背負って、一緒にその問題を乗り越えていく努力をするから、必ずお父さん、お母さんに話してね。一緒に人生を、人生を一緒に生きていこうねというのがですね、この温かな血の通った心を持った子どもを育てる、人間らしい血の通った、温かな心を持った人間に子どもを育てる教育なんですよね。**

**友人が自分を裏切ったということがあれば、普通はですね、理性で、理性で考えたら、あいつは俺を裏切った。もうあいつなんか友人じゃないと言ってしまうのは、これは理性なんですよ。だけど、現代人は、それを当たり前のことだとこう思ってしまってるかもしれませんけど、それはこの理性なんですよ。それを心を大事にする。心のつながりを大事にする。感性を大事にするということになったらどうなるかといったらね、友人が自分を裏切った。そのときどういうふうにこの対応するかというと、心を中心に、心をこの第一に考えるならどうなるかといったらですね、あいつが俺を裏切るなんて、多分、大変なことがあったに違いない。どんなにあいつはつらかったろう。どんなにあいつは苦しんだだろう。どんなにあいつは悩んだだろう。かわいそうにな、かわいそうになという気持ちが、まず出てくる。これが理性よりも心を優先させるということなんですよ。かわいそうになと思ってですね、どうするかといったら、例えみんながあいつのことを見放して、あいつの元を去っていっても、俺だけは最後まで、あいつのあのつらさ、苦しさがわかるが故に、俺は最後まであいつのことを友人として付き合っていってやろう。そこに血の通った温かな心があるわけですね。**

**だまされたら、あいつは俺をだましたんや。もうあいつは友人やない。そこには血の通った温かな心はみじんもありません。だけど、普通はそれを当たり前だと思って、そういう理性的な対応を当然だと思ってですね、おるんで、それが理性の奴隷となって、人間らしい、血の通った温かな心をなくしてしまった、理性化されてしまった悲しい人間の心なんですよ。だから、理性的な人は、今、私が申し上げてるようなことができないんですね。自分を裏切った人間に対してですね、かわいそうになとは思えないんですよ。まず理性的にむかつくわけですよ。あいつは俺を裏切った。もう友達じゃない。それは当然だと思うかもしれませんが、それが心のつながりができない、心のつながりをつくれない、心のつながりが断ち切られてしまう。まあ、そういうですね、浅はかな、温かな心がない人間の行為なんですね。この人がうそを言うたとか、人が、他人が自分をだましたと思うからね、むかつくんですよね。だけど、だいたいその自分が誰かにうそを言うということになった場合、どんなに苦しむか、どんなに悩むか、どんなにつらいかと思ったらですね、この相手の心の中が読めてくる。人間、うそを言いたくって言うんやない。だましたくてだますんやない。裏切りたくて裏切るんやない。うそも言いたくはないし、だましたくはないし、裏切りたくはないんだけど、不完全なるが故の人間の弱さ故にですね、うそを言わなきゃならんような状況に追い詰められてしまって、心ならずもうそを言うんだというね。まあ、そういうこの心情がわかってくると、血の通った温かな心を持った対応ができてくることになるわけですね。いわゆる温情のあるですね、人情味のある対応というのは、そういうところから出てくるわけであります。**

**まあ、日本の歴史の中でもですね、大岡裁き、大岡越前守のね、大岡裁きというのがあって、罪を憎んで人を憎まずというね、まあ、そういう温情のある裁きというのは、日本の、まあ、そういうこの刑法のね、歴史の中にもありました。大岡越前守というのは、元は伊勢のね、山田奉行だったんですよね。三重県の人だったんですよ。それがこの認められてね、幕府の奉行になったんですけど。まあ、とにかくこのそういう温情味のあるね、人情味のある心温かな対応というものがですね、人間関係の中でできるかどうか。これは会社というものがですね、本当にその居心地のいいというか、本当にこう喜びを持って、お互いに仕事で協力できるような、まあ、そういうふうな関係性をつくっていくためにですね、これから要求されるこの事柄なんですね。理屈じゃない。理屈も大事なんだけど、理屈よりも心を優先させる。血の通った温かな心を持った人間というのはどういうことをするのかということをですね、考えてもらいたいということですよ。**

**人間はうそを言いたくて言うんじゃない。だましたくてだますんじゃない。誰もだましたくはないんだ。だけども、だまさざるを得ないような状況に追い詰められてしまって、心ならずもだますということをしてしまう。どんなにつらいか。それがわかってくるとですね、あいつが俺を裏切るなんてどんなにつらかったろう。どんなに悩んだだろう。どんなに苦しんだだろう。かわいそうにな。それが心の対応なんです。それが血の通った温かな心を持った対応の仕方なんですよね。だけども、だましていいわけがない。裏切っていいわけがないんだ。だから、どう言うかといったら、そのかわいそうになという心情でですね、みんながあいつを見放していっても、俺だけは最後まであいつのことを友人として付き合っていってやろう。そういうこの思いを持ってですね、相手を見放さないで、で、どういうふうに言うかといったらですね、今度、そういうつらい思いをすることになったら、必ず俺に相談してくれよ。友達やないか。君一人につらい思いをさせないよ。俺も一緒にその問題を考えて、一緒にその問題を乗り越えて努力をするから、必ず俺に相談してくれ。友達やないかというのがですね、その血の通った温かな心を持って、人間を人間として育てる。まあ、そういうこの対応の仕方、心温かな対応の仕方なんですよね。**

**うそは言うたらいかん。だましたらいかん。裏切ったらいかん。これは当然なんだ。だけども、絶対うそを言うたらいかんというのは、これは人間に完全性を要求することだ。誰も本当はうそなんか言いたくはないんだ。だけども、うそを言わざるを得ないような状況に追い詰められてしまって、ついついうそを言ってしまうというのもですね、人間として避け難いこの可能性というかですね、そういうことがよくある。例え、だますためにうそを言うんじゃなくって、相手の心を傷つけないためにうそを言うこともあるわけですからね。そういう意味で、単純にですね、うそを言うたらいかんというふうに考えるのは理性だ。誰でもうそを言うときには、大概、心の中で相当悩む、苦しむ。そのことをですね、感じてあげることが血の通った温かな心ということになるわけですね。**

**まあ、ぜひそういうふうにね、この理性で対応するんじゃなくって、血の通った温かな心を持って、まず人間には関わらなければならない。親が子に対する場合でも、夫婦の場合でも、会社内部でのですね、上司と部下の関係でも、同僚との関係でもですね、とにかくはそういうこの血の通った温かな心というものを持って接するというね、まあ、そういうこの力がですね、できてくれば、会社の仕事というものもですね、非常にお互いがこの助け合いながらですね、このいろんなことが進んで、お互いを責め合わないというね、そういう状況で、責め合わないで助けてあげる。相手の駄目なところを発見したら、それを責めて非難するんじゃなくって、そっと助けてあげるというね、そういうふうなこの対応の仕方ができてきてですね、そして、そのいろいろ問題があっても、お客さんには決して迷惑を掛けない。会社員同士がお互いにですね、助け合って、対応するからですね、お客さんには迷惑を掛けないで仕事が進んでいくというふうな、まあ、そういう状態にこうなるわけであります。**

**そういう意味でですね、この血の通った温かな心を持って対応するっちゅうことは、お客さんのためである。それを社員同士がですね、お互いに駄目なところを責め合って、相手の欠点や問題点を責め合って非難するような、まあ、そういうことになってしまって、誰の責任やというようなことを言い始めたらですね、これは会社の中は殺伐としたですね、冷たい世界に変わってしまいます。理性的に責め合うんじゃなくって、まずはこの心をお互いにこの通わせ合う。心の結び付きを大事にする。そして、このお互いに責め合わないで、助け合ってですね、相手の駄目なところは補ってあげる。まあ、そういうふうなことをしながらですね、そのパートナーシップ、協力し合いながら、そのお客さんには迷惑を掛けないような、そういうこの完全に近い仕事に近づけていくというふうな、そういうこの仕事の仕方というものをしていかなければなりません。まあ、それがこの感性の時代というですね、そういうものの中で、われわれが考えていかなければならない人間関係の姿です。まあ、とにかく今のこの世界というのはですね、この外の世界においては、西洋から東洋へ、内的なこの精神世界においては、理性から感性へ、まあ、そういう大きなですね、この転換が進んでおるということを頭に置いて、われわれは仕事、あるいは自分の生き方ということをですね、考えていかなければなりません。で、そういうこの世界的なですね、状況の中でですね、われわれがこれから日本人としてどういうふうな対応の仕方をしていったらよいのかということを考えていくとどうなるかということなんですけど、世界がですね、西洋から東洋へという、そういうこの文明の中心を移し替えようとしておったり、あるいは、精神原理上、理性というものを原理にした時代からですね、感性、心を大事にするという時代にこの移り変わっていくという、まあ、そういうこの大転換が今、進んでおるという、そういうこの状況の中でですね、今、日本という国がどういうこの立場にあるのかということを考えていくとですね、これまではアメリカがですね、世界の指導者であり、アメリカが唯一の超大国といわれてですね、この世界に大きな影響力を与えるというふうにですね、考えられておりました。だけども、いまやアメリカというのはですね、その国益優先の、あまりにも独善的なですね、その姿勢が目立つがためにですね、残念ながら、現在、アメリカは世界から非難され、またこの、もはやこれからの世界の指導者はアメリカではないというふうに言われるような、まあ、そういうこの状況が今、この世界の中にはできてきております。アメリカがどう言おうと、簡単には納得しない。まあ、そういう国がたくさんこう出てきてるわけですね。**

**まあ、現在の中国でもそうですし、北朝鮮でもそうですし、また中東地域のですね、そのイスラム諸国もそうです。またドイツやイギリスなんかでもですね、ロシアなんかでも、簡単にはアメリカの言うことに賛成はしない。まあ、そういうふうな状況が国連のですね、いろんな話し合いの中でも出てきております。そういうことを考えるとですね、もはや今のアメリカというのはですね、そのかつてのように、世界から信頼され、尊敬される。世界から目標となる国家ではなくなってしまっておるっちゅうことですね。明らかに世界の中心はアメリカからアジアへと移ろうとしておる。まあ、そういう状況がはっきりとですね、現実のさまざまなこの出来事の中で読み取ることができます。そういうふうに考えるとですね、これからはアジアが世界の中心になっていく。だけども、中国やインドはですね、まだまだこの世界の指導者としての立場を担い得るような、まあ、そういう状況にはない。今すぐにでも、アメリカに代わってですね、世界の指導者となって、世界をより素晴らしい未来へと導いていくという力を、経済的にも、また文化の面においてもですね、持っておる民族は日本人しかいない。今、世界文明の中心は日本の真上にきてるというですね、まあ、そういうこの認識を持たなければなりません。**

**で、多くの方々がですね、もはや世界の中心は中国にいってしまってるんじゃないかというね、そういうふうなことをおっしゃる方も随分といらっしゃいます。それは、国民総生産というね、観点から言うとですね、もうすでに中国は日本を追い抜いてですね、世界第２位の国民総生産という、そういうふうな生産力を誇る国になってしまっておる。まあ、そういうことからですね、もうすでにアメリカから、この世界の中心は中国のほうにいってしまうんじゃないか。いってしまってるんじゃないか。まあ、そういうふうなことをですね、おっしゃる方もいらっしゃるかもしれません。だけども、今年の１月、元旦の日経新聞にですね、載ってた記事なんですけども、今年の１月、元旦の日経新聞の第一面のトップ記事はなんなのかといったらですね、国民一人一人の総資産というかですね、国民一人一人が持っておるこの総資産の金額というのはですね、日本人が断トツなんですね。日本人が今、国民一人一人が持っておる総資産というものをですね、平均すると、日本人の国民一人あたりの総資産というのはですね、約20万ドル近い。その次がアメリカでですね、15～16万ドル。その次がイギリスで、12～13万ドル。そして、フランス、イタリアというふうなね、そういう感じでこう並んでおって、中国なんかはもう10位の中にも入ってこないというね、そういう状態であります。すなわち、中国人は人口が多いからですね、だから、国民一人一人のこの生産力というか、国民一人一人のこの生産力は少なくってもですね、数が多いから、掛ければ日本を超えるんですけど、だけど、日本人はその人口がですね、１億2,000万人弱という、そういうふうな状態で、まだこれからどんどん減っていくんですけども、だけども、その人口が少ないから、掛け算すればですね、負けてしまいますけども、一人一人のこの人間が持っておる豊かさというのは、もう世界において断トツなんですね。それだけの大きなですね、生産力、生産の経済力というものを日本人は持ってるんだという現実をですね、日本人はあまり知らないんですね。アメリカ人よりも、日本人のほうが人間の価値としては大きいんだということをね、忘れてしまっておるんです。**

**で、いまだにその欧米人を尊重、尊敬し、白人を尊敬してですね、有色人種をばかにするような気持ちが日本人にはあります。日本人は、まあ、有色人種というか、黄色人のね、そういうこの中に入ってるわけですけど、だけども、欧米人ならちやほやするくせにですね、アジアから出稼ぎに来てるようなね、タイとか、ミャンマーとか、台湾とか、そういうこのところから日本に出稼ぎに来てるような人たちをなんとなくこの見下げるようなね、まあ、そういうふうな態度をもって接してる人が多いです。で、これはやっぱり、日本人として恥ずべきですね、この見識だというふうに言わなければなりません。これからアジアが燃える。アジアの統合とともにですね、この生き切っていくという力をこれからわれわれは示していかなければならないし、アジアの発展のために協力して関わっていこうというふうなですね、そういう意識を持たなければならない。これから没落していく欧米人にいつまでもですね、頼って、欧米人の後を付いていったらいいんだというのは、これはもう古い、昔の考え方であります。ヨーロッパなんかに行ってですね、町並みの素晴らしさに感動して帰ってくる人が多いんですけど、あれはどういうことなのかといったらですね、ヨーロッパはもうすでに時代の役割を終えてしまった古い町並みですからね、だから、ヨーロッパの町並みには、中世の時代やルネサンスの時代につくられたですね、そういうこの重厚な建物がたくさんあったりします。そういうこの文化の重厚さという古いものに日本人は感動して、ヨーロッパは素晴らしいと帰ってくるんですよね。**

**だけど、残念ながら、ヨーロッパには古い町はあっても未来はありません。未来があるのはアジアです。そういう意味で、もっともっとですね、見識を広げてですね、時代の動き、流れ、時流というものをちゃんとつかみながらですね、自分の人生というものを考えていかないと、本当の自分のこの人生の豊かさ、幸せ、成功というものを手に入れることはできないと思います。だからといって、欧米をばかにする必要はないのでですね、そのいいものはどんどん学んでいかなければならないんですけど、アジアをばかにしたらいかん。アジアを見下げるようなね、まあ、そういうこの醜い心を持ってはならない。で、これからアジアの時代といわれますけどですね、だけども、実際は文明はどういうふうに動いとるのかといったらね、西洋文明と東洋文明を結合して、地球文明をつくろうというね、そういう流れの中にあるわけであります。だから、アジア人というのは、これからどんどん西洋文化を学んでですね、学んだ西洋文化と自分が持っておるこのアジアの文化を結合して、そして、その西洋文化でもない、アジア文化でもない。それがお互いに相乗効果を持って、この生かされるような世界文明、地球文明というのをつくっていこうというふうな、そういうふうな意識でですね、これから世界に関わっていかなければならないわけであります。**

**だけど、大きなね、歴史の流れから言うとですね、これからは、このアジアが中心になってくる。そのアジアの入り口は日本なんですよね。そういうことを考えるとですね、今、このわれわれ自身が自分の生活を考えて、自分、日本の上に世界文明の中心があると思えないというね、まあ、そういう実感を持った人が多いと思うんですけど、だけど、大きな歴史の流れから言うと、確実にですね、今、日本の真上に世界文明の中心がある。すなわち、われわれは21世紀において、アメリカ人に代わって世界の指導者としてですね、世界のために貢献しなければならない。人類のために貢献しなければならない。今こそ日本人は世界のために、人類のために、この自分の持てる力をですね、役立てるときがきたんだというですね、まあ、そういうふうな自覚、認識を持って、いろんなことをしていかなければならないという時代に入りました。そして、やがては世界文明の中心は日本から韓国へ、中国へ、インドへと、だんだん、だんだん、西のほうにですね、進んでいくんですけども、だけど、まだ中国の現状を考えるならばですね、中国の方々の人間性や能力や経済活動の状況というのはですね、まだまだ世界から信頼され、尊敬されるような、まあ、そういう状況ではありません。本当に中国の方々がですね、世界文明の中心を担って、世界の指導者となって、世界のために、人類のために貢献できるという状況に至るためにはですね、まだ中国は200年以上の長い時間を必要とします。でないと、この中国のあの広大なですね、国土の中に住む人たちを今よりももっと高い水準に成長させていく。まあ、そういうことはですね、そう短期間にはできません。**

**教育の面を考えてもですね、また文化の面を考えても、政治を考えてもですね、中国の方々がいつまでも政治体制として共産主義というものを持ってる限りはですね、世界の指導者にはなれません。早く政治体制としては共産主義を脱却してですね、そして、その新しい政治体制というものをつくる力を持たないとですね、共産主義という政治体制では、この今の世界に支持されるようなですね、まあ、そういうこの活躍というのは無理であります。で、共産主義体制というのは、ある意味で、平等というものを基本にした画一化を追求するような、まあ、そういうこの政治体制ですからね。だけど、もはや理性的に画一性を追求するという、イデオロギーの時代は終わったんですよ。これから個性の時代といってですね、みんな考え方も違っててもいいんだ。みんな立場も違っててもいい。みんな宗教も違っててもいい。みんな違ってていいんだという個性の時代というものをこれから世界は迎えようとしてるんですからですね。だから、いつまでも画一化を追求するような、そういうこの政治意識、そういうイデオロギーというものを持っておったのではですね、これからの時代の指導者にはなれません。**

**ましてや、インドはまだまだ先のこの話なんですよね。まだまだ中国もインドもですね、この欧米の科学技術文明や、欧米のこの社会というものを見習ってですね、そして、その欧米に追い付こうとするような、そういうこの活動を今、してるわけである。だから、まだまだですね、後進国的なね、そういう立場にあるわけですけど、日本人は、もうすでに欧米の文化を吸収し尽くしてですね、いまや科学技術文明、欧米人がつくった科学技術文明においても、日本人はその先頭に立ってですね、この科学技術文明の頂点を握ってるというですね、まあ、そういう立場であります。もうこれは、まあ、今の時代のですね、その科学技術の最も最先端の武器というのは、携帯電話というふうにいわれております。だけど、その携帯電話の８割、携帯電話の部品の８割は日本製であってですね、日本製の部品を使わないと、世界最高品質の携帯電話はできないという時代なんですよ。実際問題、ものを小さくするって、ナノミクロンという単位での技術というものはですね、もう日本の独壇場であって、誰もまねができない。まあ、それほどにですね、日本人は西洋人がつくった科学技術も吸収し尽くしてですね、さらにその先頭に立って、今、活躍してるという、まあ、そういう状態であります。そのことを考えてもですね、日本人はこれからの世界においてですね、アメリカ人に代わって、すぐにでも指導者としての役割を果たし終える資格を持っておるというふうに言わなければなりません。**

**経済力においてもですね、日本は世界に金を貸しまくっておる。日本は世界最大の債権国なんだ。アメリカは反対に世界最大の借金国でですね、世界最大の債務国だ。一番借金が多い。だから、現在のアメリカは、双子の赤字に苦しむというね、国際貿易においても、貿易赤字がたくさんたまっておるし、国内の政治においてもですね、たくさん国民に対する借金がある。双子の赤字に苦しんで、まあ、ようやくなんとかですね、日本の財力の助けによってですね、アメリカの経済は持ってるというふうな、そういう状況であります。そのことに日本人の経済力というのは、世界的に見てすごい力を持ってるんですけど、そのことを日本人は教えられてないんですよね。いわゆる外国に対して謝らなきゃならないような、謝罪外交ばかりさせられてしまってるもんですから、日本人がどんなにすごい力を持ってるのかということを、日本人自身が教えられてないっちゅうか、知らないんですね。政治なんかでもですね、日本人はもっともっとですね、度胸を持って、勇気を持ってね、その自分の考えを発言したらいいのにですね、なんかこう外から非難されたらいかんと思うような、そういうこの弱気というかですね、そういう謙虚さがあまりにもあり過ぎてですね、あまり自分の意見を言わないで、みんなの意見に合わせてしまうような、まあ、そういう状況になっております。**

**だけども、今、日本人は、この世界に金を貸しまくっておるんですから、だから、金を貸してる限りは、それだけの発言力を持っても構わないのでですね、もっともっとこの堂々とですね、自分の意見をすることなくですね、することなく堂々と自分の意見を言って、そして、このみんなに日本という国がどういうことを考えてるのかを知ってもらうというふうな、まあ、そういう努力をする必要があります。べつにその威張る必要はないんですけどね、だけども、あまりにも遠慮し過ぎてですね、自分の考えを言わなさ過ぎる。本当はもっともっと日本人はですね、この世界に対して指導的な役割を果たし得る能力というものをですね、この日本の伝統文化においても持っておるのにですね、それをこの言わないがために、世界はどうしていいのかわからないような状況で、さまざまな迷いの中にあるというのがね、残念ながら現状だというふうに言うことができます。日本人が本当に堂々とね、自分の意見を述べればね、多くの世界のね、民族がそれに賛成してくるというね、まあ、そういう状況になるんじゃないかと思うんですけど、残念ながら日本は、アメリカの属国のごとくですね、アメリカの言うことに無批判に従うというふうな、まあ、そういう状況で本当に情けないようなですね、感じにこうなっております。アメリカにこびへつらうという状況の中にある。**

**それが、まあ、いってみれば、アメリカに逆らったらですね、政治的にも、この核の傘で守ってもらえなくなってしまうとかですね、あるいは、経済的にいっても、アメリカにものを買ってもらえなくなってしまったら、日本の経済はそのいっときですね、非常に困った状況になるかもしれないとか。そういうふうなことを考えてるんですけど、アメリカに勝ってもらわなくってもね、もうすでにアジアにたくさん買ってもらってるんですからね。アメリカに買ってもらわなくても十分にやっていける経済力を日本人は持っております。なのに、そのいつまでのアメリカべったりでですね、アメリカの属国のごとく、アメリカにこびへつらって、このアメリカの言うがままにいろんなことをやってしまう。アメリカの言うがままに憲法改正をしようとしたりですね、そのアメリカの言うがままに、自衛隊を海外に派遣するような、まあ、そういうふうなことをですね、画策してしまうような、まあ、そういう状況で、アメリカの要請でやってることなんですよね。まあ、こういう非主体的なですね、そのあり方というのは、やっぱり日本人としては情けないと思います。**

**まあ、これは決して政治的に自民党を批判するというわけではないんですけど、常識的に考えてですね、そういうこの戦争に参加していくようなかたちにこうなっていってしまう恐れがあるということは、やっぱりこれはちょっと注意せんないかんな、考えないかんなということだと思うんですよね。まあ、そういうこともあって、今回のね、選挙は自民党に非常に大きなね、その自民党じゃない、民主党にね、多くの若者たちが、その票を入れるということになっていきましたし、また、若い政治家がどんどん増えてきてですね、そして、その自分たちが将来、戦争に駆り立てられるというようなことになってはならないというね、そういうふうなこともあってですね、野党陣営の票がですね、伸びるような、まあ、そういう状況でした。まあ、そういうこのことを考えるとですね、もっともっとわれわれは、民族として自信を持ってですね、堂々とこの自分の考えというものを外国人に聞いてもらって、そして、その賛成してもらえるような、そういう力をですね、つくっていく努力をしていかないと、いついつまでもアメリカべったりで、ほかの国の言うがままに、謝れっちゅったら、はい、そうですかって謝ってしまうというような、そういうことばっかりやっておったんでは、いつまでたってもですね、日本の国力というものを本当に世界のために役立てるというふうな、まあ、そういう積極的な関わり方ができません。**

**アメリカから金を出せと言われれば、はいはいって金を出すしですね。ほかの国から自衛隊を派遣してくれといったら、自衛隊を派遣するし、まあ、とにかくほかの国の言いなりに動いておったら、それでその、まあ、事なかれ主義でですね、うまくいってしまうだろうというような、そういうふうな、なんか非主体的なですね、このことでは、やはりその国民としては情けないというね、そういう思いを持たざるを得ません。で、そういうことを考えるとですね、早くそのわれわれは、これからアメリカ人に代わって世界の指導者となるんだ。だから、世界から信頼され、尊敬されるような人間性と能力をこれからわれわれは磨いていかなければならないんだ。そのことをですね、まずちゃんとこう頭に置いてもらいたいんですよね。そして、諸君もやがて結婚すればですね、子どもができる。子どもを育てるときにはですね、子どもにこの惨めな思いをさせないようにですね、君たちはこれから世界の指導者になるんだ。だから、この世界から信頼され、尊敬されるような能力と人間性を磨いていかなきゃならないんだよということをですね、もうちっちゃいあいだから、物心つかないあいだからですね、自分の子どもにおとぎ話のように言って聞かせながらですね、子どもを育てるということをこれから日本人はしていかなきゃなりません。そういう自覚を与えないとね、なかなかそういう目標をちゃんと与えてあげないと、そうなれないんですよ。どういうことを目標にして生きていったらいいのかということをですね、学校では教えてくれません。目標というのは、みんなそれぞれ勝手につくれよというような、そういう感じでですね、その学問的な、常識的な知識や技術しか教えてくれませんからね。人生の生き方というものをですね、教えてくれませんので、それはやっぱり、家庭でちゃんとやっていかないといかんことです。**

**そういう意味で、自分の子どもを本当に立派なですね、この人間性の豊かな子どもに育てようと思ったらですね、まあ、そういうふうな希望を持たせながらですね、どういうことを目標に生きていったら、この人間として素晴らしくなれるのかということを子どもにちゃんと言って聞かせながら、子どもを育てていくということをする必要があります。そのことを時流、時の流れということから考えるならばですね、これから日本人は子どもを育てるときにですね、もう２歳ぐらいになったらね、そろそろ言葉もしゃべれますし、言葉もわかり始めますのでですね、君たちはこれからこの人類の指導者になるんだ。だから、全世界から信頼され、尊敬されるような、そういう能力と人間性をつくっていかなければならない。まあ、そのためにこの努力して頑張らなきゃならんのだよというね、そういうことをもう物心つかないあいだからそうなんだとこう思わせるようなね、そういう感じでこう教えていくというね、まあ、そういう教育の仕方をしていかないといけません。決してその傲慢な態度でね、世界に接するような、そういうことじゃなくってですね、これから世界のため、人類のために、日本人は役立つような生き方をしていかなければならないんだ。自分だけの国がこのよかったらいいというのは、そういう独善的なですね、国益優先の独善的な愛国心じゃ駄目だと。全人類のため、世界のために役立つような人間にならなきゃならんのだよということを言ってですね、そして、その子どもにその自覚をちっちゃいあいだから植え付けていくというね、まあ、そういうふうな教育の仕方をする必要があります。そのためにも、お父さん、お母さんとして、まず皆さん方がですね、その心の準備をですね、今からちゃんとしておかなければならない。できれば、自分自身がですね、これから自分を磨いていって、本当に人類のため、世界のために役に立つ、貢献できる。まあ、そういうふうなですね、この人間になれる努力をですね、していく必要もあるわけであります。**

**で、この今、どうして日本の真上に世界文明の中心があるということがですね、証明できるのかということなんですけど、これは世界史のですね、流れから見るとですね、どういうことが言えるかというとですね、この今の人類の文明というのは、アフリカ中部の大地溝帯っちゅうところから始まった文明なんですよね。で、今の人類の文明というふうに、私が申し上げたのは、今、いろんなところで、世界中でですね、古代文明の発掘が進んでおりましてですね、今の人類の文明以前に、もっと素晴らしい文明があったというね、そういうふうな考え方もありますのでですね、そういう意味では、今の文明、今のわれわれが持ってる文明の出発点は、このアフリカ中部の大地溝帯というところから始まった文明だというふうな、そういう言い方をしないとですね、いけないのが、まあ、現状であります。まあ、とにかく今の人類の文明は、アフリカ中部の大地溝帯というところから始まって、そして、やがて北部のエジプトにいき、さらに北部のメソポタミア地方、現在の中東地域にいってですね、そこからですね、その世界文明の中心というのは、東のほうのインドにいくか、西のほうの地中海のほうにいくかという、そういう分かれ目、ちょうど文明の分岐点といわれてる、そういう状況があったんですね。どちらにいく可能性もあった。**

**だけども、結果としてはですね、その中東地域、メソポタミア地方からですね、そのインドのほうにはいかないで、世界文明の中心はメソポタミア地方、バビロニア地方からですね、ペルシャ、ギリシャ、イタリアというふうに、こう西のほうに動いていくというね。まあ、そういう結果になりました。なんでその中東地域からですね、西のほうに文明が動いていくということになってしまったのか。そこには理由があってですね、この中東地域、メソポタミア地方の宗教が太陽信仰、太陽を神としてあがめまつるですね、そういう太陽信仰というものを持っておった。アラーの神をね、このまつる、そういう信仰を持っておった。太陽信仰を持ったこの民族というのはですね、永遠に、永遠に日の沈まない国を求める。で、永遠に日の沈まない国を理想とするという、まあ、そういうことになってくるとですね、太陽が東から出て、西のほうに進んでいくもんですから、西のほうに進んでいく太陽に付いていったら、永遠に日が沈まないんじゃないのっていう、そういうこの意識になってしまっちゃったりなんかしちゃったりなんかしてですね、で、なんとなくこう、西のほうにこう意識がいってしまうというね、そういう状況で、この文明が西のほうに進んでいくという結果になったんだというふうに、まあ、一応、この説明されてるんですね。**

**まあ、とにかくそういうことで、このバビロニアからですね、やがてそのペルシャに文明の中心が移り、ペルシャからギリシャにいき、ギリシャからイタリアにいき、イタリアからヨーロッパ、イギリス、アメリカというふうに、世界文明の中心を担う国家、民族は変わっていきました。そして、これからアジアが燃えるということになってくればですね、そのアジアの中でも今、一番この国家として栄えておる国は日本だ。だから、アメリカから次にどこへいくのかというと、太平洋を渡って、そしてこの日本、そして韓国、中国、インドというふうに、世界文明の中心は移行していくというふうにですね、考えなければならない。これはもう、誰も否定することのできない未来なんですよ。もう決まってしまってるんですよ。そして、インドにまで世界文明の中心がいくころにはですね、この地球はもうすでに一体化した、そういう文明圏になっておって、地球文明ができておってですね、そして、人類は、この全民族が協力しながら、宇宙を生活空間に取り入れながら、宇宙をこの舞台に活躍するような、そういう状況に人類はなっておるであろうというのがですね、この今日の世界史の流れというものから推測される未来のあり方であります。**

**まあ、そういうことを考えていくとですね、新しい時代というものは、常にですね、その時代の中心を担う風土を変えることによって、新しい時代がつくられていくということになっているということを、そこから見て取ることができるわけですね。風土を変える。文明の中心がどういうふうに変わっていくかによってですね、どういう歴史がつくられていくかが決まるんだ。風土を変えないと、歴史はつくれない。風土を変えていかないと、新しい時代はやってこないということがですね、世界史の流れというものを見てみるとわかります。日本史の流れを見てもそういうことが言えるのでですね、日本もどういうこの歴史を刻んできたかといったらですね、日本の古代は現在の奈良県であり、大和地方であった。で、中世になってですね、平安遷都で京都に都を持っていった。そして、この武士の時代になって、京都から鎌倉に政治の中心が移る。だけど、鎌倉は非常に平野が狭いところなので、あっという間にですね、鎌倉時代は終わってしまって、そして、足利尊氏がもういっぺんですね、京都に都を持っていって、京都の室町に都を持っていった。で、室町幕府ができた。**

**だけど、京都という風土はですね、もうすでに、その平安時代中世においてその役割を果たし終えた風土である。もう京都という風土は、中世の時代にその風土が持ってる個性を全部出し尽くしてしまった。だから、京都というこの風土は、もう二度と日本という国家を発展させる余力を持っていない。だから、その足利尊氏が京都の室町に都を持っていったと同時にですね、国家が乱れ始めてですね、やがて戦国時代になってしまう。そして、この豊臣秀吉によってですね、徳川家康が関東に移封される。関東平野がですね、日本の政治の中心になる。そこで、ようやくですね、日本は新しい時代である近代という時代を開くことができた。そして、この東京が日本の都になってから、もうすでに400年以上経過しておる。いかに広い関東平野といえどもですね、もうその風土が持ってる余命は尽きたと言わざるを得ない。だから、日本に新しい発展の可能性をつくっていこうと思ったらですね、東京からまったく新しいところへ日本の首都を移動させなければですね、日本の新しい可能性は生まれてこない。日本の未来はない。そういうことがですね、この世界史の流れや、日本史の流れというものを見ていくと、言えるわけであります。これも非常にですね、今という時代に生きるわれわれにとっては、非常に大事なこれは考え方なんですよね。**

**日本が新しい発展段階に入るためにはどうしても遷都をしなければならない。遷都というのは、国の中心を移し替えるっちゅうことですよね。そうしないと、日本に新しい時代がやってこない。いつまでも東京に都があったのではですね、東京都とともに日本は衰退していってしまう。東京というところは、近代日本をつくったそういう中心地ですからね、だから、もはや東京というところは、再開発をするべきところではない。東京というところは、近代日本をつくった遺産を保存する段階に入ったんだ。もう再開発をして、近代日本の遺産をこの壊してしまうようなね、そういうことはしてはならない。東京は、これから近代日本の遺産を保存するというですね、まあ、そういうこの段階に入った。そして、京都が日本の中世の遺産を保存してるようにですね、東京は日本の近代の遺産を保存することによって、東京独特の発展というものを考えるべき、そういうときにきたというふうにですね、考える必要があります。**

**で、これは、まあ、風土論といってですね、中国で言えば風水の考え方ですけど、風土というものをこの基本にしながら歴史を考えた場合には、そういうことが言えるわけなんですね。実際問題、世界史というものもですね、この文明の中心を移し替える、風土を移し替えることによって、世界は歴史を刻んできたというのがですね、事実ですので、そのことを考えるとですね、今はアメリカという風土から日本という風土に世界文明の中心が移動しておる。まあ、そういうこの段階なんだとですね、言うことができるわけであります。その意味で、今、日本の真上に世界文明の中心があるんだ。これから日本人は、世界文明の中心を担ってですね、ようやく日本も世界のために、人類のために大きな貢献をしなければならない。そういう使命がですね、今、日本人の真上にやってきてるんだ。俺は何をして人類のためになろうか。俺は何をして世界の役に立とうか。そのことをですね、一人一人が考えなければならない。そういう時代になってきてるわけであります。そういう意識にならないとね、なかなかそういう活動はできません。俺なんかというように思っとったらですね、いつまでたってもうだつが上がらん。ようやくわれわれが、この人類のため、世界のために貢献することができるときをですね、この天から与えられた。そういう使命を持って生きるときがきたという、そういう自覚を強くわれわれは持たなければならないということですね。**

**じゃあ、具体的にわれわれはこれからどんなことをしたらよいのかということをね、次に、まあ、考えていかなきゃならんですけど、ちょうど４時半ですので、これから10分間、休憩を入れて、次の後半の話に入りたいと思います。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の話に入ります。まあ、とにかくですね、この今の世界の中での日本の位置というのがですね、どういう状況になるのかということをちゃんとこう見つめてもらってですね、もっともっとこの自信を持って、自分のあり方というものをですね、考えてみてもらいたいと思うんですよね。経済力においても、日本はこの世界に肩を並べるものがない、断トツのですね、状況にある。それから、また、科学力においても日本は今、世界の先頭をですね、走っておる。まあ、そういうこの国家である。で、まあ、そういうことをですね、こう考えてみるとですね、この世界全体が理性の時代である近代から、次の新しい時代である感性の時代へと移行しようとしておるという、そういうこの中でですね、日本人はその世界の流れを自分が引き受けながらですね、この、まあ、ちゃんと西洋から東洋へと文明の中心を移し替えていくという、そういうこの仕事をですね、ちゃんとこう責任を持ってやり遂げていくというようなことを考えなければなりませんし、また理性を原理にした物事の考え方、対応というものからですね、感性を原理にした、心を原理にした物事への対応の仕方というものをちゃんとこの世界の人々に教えていくような、まあ、そういうこの指導的な役割を果たさなければならない。**

**まあ、すなわち日本人は、この理性の時代である近代から、次の新しい時代である感性の時代というものへですね、この時代を進めていく、その役割をですね、主体性を持って果たしていくような、まあ、そういう立場にあるんだっちゅうことですね。まあ、それがこの近代から次の新しい時代へという過渡期を担うというね、まあ、そういうふうにこう表現することができるわけであります。日本人は、近代から次の新しい時代への過渡期を担うという、そういう立場にあるんだっちゅうことですね。まあ、その意味では、日本人は世界史上、近代から次の新しい時代である第３の過渡期ですね、近代から次の新しい時代へということを、これは人類史上、第３の過渡期というふうに言うことができますので、日本人は人類史上、第３の過渡期を担って、世界のために活躍をしなければならない、かときっちゃんであるというね、まあ、そういうこの自覚をですね、持たなければならない。**

**で、第３の過渡期というのはどういうことなのかといったらですね、この過去を振り返れば、人類は２回の大きな過渡期を経験してきておる。第１回目はですね、古代と中世とのあいだに横たわる過渡期であるギリシャローマ、これが第１回目の過渡期ですね。第２回目は、中世と近代とのあいだに横たわる過渡期であるルネサンスですね。これが第２回目の人類史の過渡期であります。そして、今、近代から次の新しい時代への過渡期に人類史が入っておる。そのときに、今、日本の真上に世界文明の中心がきておるんだ。ということは、日本人は、人類史上、第３の過渡期を担って活躍をしなければならないかときっちゃんである。まあ、そういうこの理解の仕方がですね、できるわけであります。で、そういうこの観点からですね、近代から次の新しい時代への流れをですね、責任を持ってこの実現させなければならない。まあ、そういうこの意識が必要であるわけですね。**

**で、そのわれわれが時代のこの中心を担って活躍するっちゅうことはどういうことなのかといったら、仕事から言えばですね、この時代の中心を担う国家や民族からはですね、あらゆる職業領域におけるこの指導者が出てくるというのがですね、これまでの歴史を見た場合にわかることであります。そういうことを考えたらですね、今日、日本人はどんな仕事をする場合でもですね、どんな仕事をする場合でも、俺はこの仕事において世界の頂点を極めるぞ。俺はこの仕事で世界の頂点に立つんだと。また自分たちは、このアサヒグローバルという会社をですね、この世界最高のですね、建築会社にするんだ。まあ、そういうふうな思いを持ってですね、この生きる必要があるということですね。これからはですね、大きな会社をつくることが発展ではありません。これからの時代は、量から質へとあらゆるものを転換していくっちゅうことを考えるならばですね、会社は小さくても、この建築という仕事において、自分たちはこの世界最高水準の仕事をしてるんだというですね、まあ、そういうこの状況にしていく。それがこれからの会社の発展の目標というかですね、理想であります。建築業界において、自分たちのやってる仕事が、今の世界の建築業界において最高水準の仕事なんだと。そして、俺たちはこの世界最高水準のこの仕事をもってですね、この消費者に関わってるんだ。まあ、そういう誇り高い仕事の仕方ができる。まあ、そういう状況にですね、持っていかなければならない。**

**今、自分たちがやってるこの仕事において、俺は世界の頂点を極めるんだ。世界の同業者は俺たちを目標にやってくるんだ。まあ、そういうふうなですね、この意識でわれわれはこれから仕事をしていくことが必要であります。自分たちがやってる仕事の水準以上のものはないんだ。俺たちは現在、考えられるこの最高水準のですね、この仕事の仕方をして消費者に関わってるんだ。だから、誇りを持ってその仕事ができる。そういうふうなですね、状況にしていくことを理想とし、目標にして自分の能力を磨き、また会社の発展というものを考えなければなりません。で、建築業界といっても、さまざまなですね、その活躍の領域がありますので、何をもって世界の頂点を極めるか。どういう、この点においては、俺たちは世界一だと言えるね、そういうものをですね、何かしら早くつくることが大事なんですね。このことに関しては、世界のどの建築会社にも負けないというものを自分たちは持ってるんだと言えるようなものをですね、早くつくることがこの会社の存在価値、会社の存在感というものをつくり出すうえで、非常に大事なこの目標であります。何を取ってもですね、トップではない。何を取っても２番手、３番手だというね、それではですね、その会社の存在価値は非常に低くなってしまってですね、この消費者に対する場合でも、自信を持って対応することはできません。この点については、世界のどの会社と比べてもですね、負けないという、まあ、そういうものを持って、この消費者に関わる。あるいは、それをもってですね、自分たちの仕事の誇りとする。まあ、そういうふうな状態にこの会社の発展というものをですね、持っていってもらいたい。で、これは建築会社だけじゃなくってですね、どんな仕事をする場合でもですね、なんからの点で、この点に関しては、俺たちは世界一だと言えるものを持つこと。それがですね、世界文明の中心を担い得た、この国家、民族のですね、この目標というふうに言うことができるものです。そして、その世界の同業者は、この点に、この技術、このことに関してはですね、俺たちを目標に世界の同業者はこの頑張る努力をするんだ。俺たちのこの水準を目標にして世界の同業者はこのやってくるんだ。俺たちはこの世界の目標になってやるんだというね、まあ、そういうふうな心意気でですね、この自分の能力を磨き、また仕事を考えなければなりません。**

**そして、社員一人一人、社員一人一人の方々がですね、自分はこの点に関しては、この世界一の能力を持ってるんだ。世界において、これ以上の水準はないんだというものをですね、その一人一人がなんらかの意味で、この点に関しては俺は世界一だと言えるようなね、そういうものを目指していくということを目標にする必要があります。それが個性というものをですね、持ったこの会社の社員のあり方であります。一人一人がなんらかの意味でこの世界最高水準というものをですね、身に付けていって、そして、このどんなことをする場合でもですね、そういうこの最高の水準の能力を組み合わせて、そして、その消費者に対応していくというふうな、まあ、そういうかたちでですね、世界最高水準の仕事を社会に対して提供していくという、そういう意識でこれからは仕事をしていく。まあ、そういう目標をね、立てないと、そういうことになかなかなっていきませんので、ぜひそういうふうなことをですね、考えて、自分の能力をどういう点において伸ばすかということをですね、ぜひ考えてみてもらいたいと思います。人類の指導者になるということは、そういうことを具体的に考えていくことなんですね。**

**で、そのほかのことを考えるとですね、なんで日本人が世界の指導者になることができるというふうにですね、言うことができるのか。それはですね、まあ、これからのその人類は平和ということを目標にして、この生きていかなければならない時代に入るんですけども、平和の原点といえば広島だというね、まあ、そういうことがあると。そのことを考えるならばですね、日本人はこの世界を戦争の状態から平和の状態へと導いていく、まあ、そういう指導者としてのですね、役割を果たさなければならない。そのときに考えなければならんことはですね、これからは、この個性の時代であって、宗教が違っても、考え方が違っても、感じ方が違っても、立場が違っても、民族が違ってもですね、みんなこの仲よく生きていかなければならないという、そういうこの個性の時代を迎えるんだと。そのことを考えるならばですね、この今の日本の状況というのはどういうこのことになってるかといったらですね、日本には世界の音楽がある。日本には世界のこの舞踊がある。日本には世界の文化がある。日本には世界の食卓がある。世界の食文化が日本にはある。日本にはさまざまなですね、そういうこの相異なる文化の要素がたくさんこう取り入れられてるわけですよね。日本にはさまざまな宗教がある。だけど、誰一人、殺し合ってはいない。日本人は世界から素晴らしいものをみんな受け入れて、理性的には相矛盾するものであってもですね、それをちゃんと受け入れて、われわれはそれを楽しんでおる。**

**そして、家庭の中を見ればですね、その仏壇もあるけれども、神棚もあったりなんかしてですね、そして、その家の女の子はクロスのネックレスなんかして歩いておったりしてですね、で、車の中を見たら、成田山のお守りがあったりなんかして、何を信じてやってるんですかというような感じなんだけど、全部、いいじゃんってやってるわけですからね。なんの矛盾も感じない。理性的には、この相いれないものをですね、たくさん取り入れながらもですね、そこになんの矛盾も感じていない。そういうのが、日本の文化の特徴であります。で、こんな文化は世界にはありません。だけど、そのさまざまな宗教が一家の家の中に混在しておって、誰もそれに違和感を感じたりですね、そこに矛盾を感じたりしていない。全部それを受け入れてしまっておる。さまざまな食事の仕方を、さまざまな食事の仕方を楽しんでおる。さまざまなこの相異なる文化をですね、取り入れながらですね、その何もそこに矛盾を感じていない。だけど、これがですね、これから人類が目指すべき未来の姿なんですよね。これから人類は宗教が違っても、仲よく生きていかなければならない。食事の仕方が違っても、そのことによってですね、その住むところを制限されたりなんかするようなですね、まあ、そういうことでなくってですね、いろんな食べ物を自由に楽しめるような、そういうふうなこの環境をつくっていかなければならない。**

**文化が違うとですね、住むところを定められたりなんかしてね、アメリカやなんかに行っても、中国人村とかですね、日本人街とかですね、中国街とか、メキシコ街とか、いろんなその国によって、民族ごとにこの住むところを定められてしまってですね、そして、その差別されてしまってるような、そういう状況がたくさんあります。これは全世界にどこにでもあることなんですけども、ヨーロッパに行けばユダヤ人街とかですね、そういうこのいろんな、そういう民族によって排除されてですね、あるところに集められてしまうような、まあ、そういう状況があったりなんかします。だけども、これからの世界はですね、考え方が違っても、民族が違っても、イデオロギーが違っても、この食事の仕方が違ってもですね、排除し合わないで、お互いにこの矛盾を感じないで仲よくやっていける。そういう状態をですね、これから世界の中につくっていかなければならない。そのことを考えるならば、今それができてるのは日本人だけだと。そういう点からもですね、個性の時代の指導者は、世界広しといえども、日本人しかいない。まあ、そういうふうにですね、言うことができるわけであります。**

**それから、西洋文化と東洋文化をですね、自らの意志によって結び付けるということをして、和魂洋才というですね、まあ、そういうこのかたちでの独特の文化をつくることができたのは日本人だけだ。日本以外のアジアの諸国はですね、欧米人によって無理やりに植民地化されてしまって、欧米の文化を押し付けられて、受け入れさせられてしまった。だけど、日本人は、欧米文化を押し付けられたんじゃなくって、自らアメリカに出ていき、自らヨーロッパに出ていってですね、欧米文化を自ら学び取ってきて、そして日本にそれを持ち込んでですね、そして、この伝統的な日本の文化、アジアの文化と、その欧米の文化を融合させることによって、和魂洋才という独特のですね、この文化、あり方をつくり出すことができた。自分の意志に基づいて、主体的に西洋と東洋を結び付けた実績のある民族は日本人だけだ。欧米人もですね、いろいろアジアのことは研究しますけど、だけども、アジアの文明を取り入れてですね、そして、その西洋文明を発展させようとするような、そういう意識で欧米人はアジアの文明を研究するのではないんですよ。欧米人が他国のことを研究し、欧米人がアジアのこの文化を研究するのは支配するためなんですよ。支配するためには、よく知らなければならない。だから、いろいろと研究してですね、調べて、そして、そのことによって、どうすれば欧米人がその国を支配することができるか。自分たちの思うままにその国を支配できるか。そのことをこの画策してですね、欧米人はアジアのいろんな文化を研究して調べるわけであります。決してこの東洋文明と西洋文明を結び付けようとしてですね、そういう研究をするのではない。**

**だけど、日本人は、自らの国を発展させるためにですね、欧米文化を自ら出ていって研究して持って帰ってきて、そして、自らの伝統的な文化とそれを融合させることによってですね、日本を発展させるような、まあ、そういうこの歴史のつくり方をしました。まあ、その意味においてはですね、これから人類が目指すべき地球文明というものをですね、つくっていくために、西洋文明と東洋文明を結び付ける、融合させるということにおける指導者としてのですね、力を持っておるのも、日本人しかいない。まあ、そういうふうなですね、言い方ができるわけであります。特に今の21世紀という、この100年間を考えたならばですね、まだまだこの中国やインドは、欧米の文化を取り入れるというふうな、そういうこのことにですね、熱心であって、またどちらかというと、このイスラム圏は、欧米の文化にはまだまだ反発を感じておってですね、そして、その欧米文化を取り入れながら、自分たちを発展させようというんじゃなくって、まだ対決色が強い。まあ、そういうこの状況であります。だけど、日本人は、そういう対決色なくですね、その欧米の文化を見事に取り入れながら、しかもその文化においても、世界の最頂点に立ってですね、活躍をしておる。まあ、そういうことを考えるならばですね、この個性の時代の指導者は日本人しかいない。また、そういうこの愛、宗教が違い、考え方が違っても、仲よく生きていけるというね、まあ、そういうふうな力を持たないと、世界を平和な状況に導いていくことはできませんのでね、その意味においても、日本人しかこの世界平和を実現するための指導者はいないというふうに言うことができるわけであります。**

**そして、このなおかつ、平和の原点といえば広島だといわれるようなですね、そういうこの歴史的な事実を持っておる。世界平和のこの指導者というか、世界を平和に導くための平和の名手となることができるのは日本人だけだ。そのことをですね、広島、長崎というところに原爆を直接落とされた。そういう体験を持ってるのは日本人しかいないんですからね、自分の国土に他国から原爆を落とされた体験を持ってる民族は日本人しかいない。なぜそういう事実がつくられたのか。それは、この原爆の悲惨さというものを日本人に味わわせることによってですね、もう二度とこんなことがあってはならないという思いで日本人を立ち上がらせて、核の時代において、本当にこう世界をですね、平和に導いていく指導者としての役割を日本人に担わそうとして、天は、神仏は、日本の国土に２回もご丁寧にですね、原子爆弾を落とさせるという事実をつくったんだというように考えなければならない。まあ、そういうことを考えていくと、いろんな角度からですね、考えてもですね、21世紀の世界というものをですね、より素晴らしいものにこう発展させていくという、その指導者というのは、今のところ、日本人しか見当たらないという、そういうことが言えるわけであります。まあ、そういうこともあって、今、日本の真上に世界文明の中心がある。21世紀は日本人がこの中心になってですね、世界のために貢献しなければならない時代なんだ。そのことをぜひですね、このよく理解しておいてもらいたいと思うんですね。**

**で、とにかく仕事においてはね、自分の能力においては、この力、このことに関しては、俺はこの世界最高水準の力を持ってるんだというふうにですね、言うことができるような、そういうものを何か一つ、早くつくるということをですね、ぜひ目標にして、自分の成長を考えてもらいたい。このことについては、俺は世界の頂点に立ってるんだ。自分と同じ水準である人間が何人もおってもいいんですけどね、とにかく今、自分のやってるこのことは、世界においてこれ以上ない、最高水準なんだというものをね、自分がなんらかの点で、何か一つ身に付けるというね、まあ、そういうことをぜひですね、考えてみてもらいたい。そして、会社全体としてもですね、この建築会社として、この点に関しては世界最高水準の力を持ってる建築会社だと言えるようなものを会社としてもですね、何か一つ持つことを目標にする。そして、全社員の方々がですね、団結してですね、この点に関しては、俺たちは世界一だとこう言えるようなですね、そういうふうなものをこの目標にして、そして、その世界の同業者は、俺たちを目標にやってくるんだと言えるような、まあ、そういうこの会社にしていく。そのためにみんな力を合わせて頑張ろうというようなね、まあ、そういうこの心意気でですね、燃えて、世界の頂点を目指して、みんなが燃えてですね、その努力をするというふうな、そういうモチベーションをね、ぜひ持ってもらいたい。**

**なんかそういう目標をつくらないとね、命は燃えないですよ。この点に、このことに関しては、俺たち世界一になるんだって、そういうことがはっきりしてくると燃えるわけですよね。そんな世界一なんて無理無理と言っておったんじゃ、燃えませんからね。やる気も出てきませんからね。まあ、適当に、今、持ってる力でできることをやっておったらいいんやと。そう無理はせんでもいいんや。そんなことを言うとったんでは、いつまでたってもですね、このほかの会社とドングリの背比べというような、そういう状態でですね、この競争をして、競争に疲れ果ててというような状況になってしまいます。この点に関しては世界一やっちゅうことになってくるとですね、そういうことを求める、その消費者は、こちらから誘わなくっても、向こうから調べてですね、やってきてくれるっちゅうような、そういうことになってくるわけですよね。全世界から引き合いがくるというようなね、そういう状況になってくるはずであります。そしたら、もっと楽してですね、金をもうけることができるという、そういう状況になりますからね。とにかくその意味でもですね、なんらかの点で世界の頂点に立つべきだ。ぜひそういう目標をですね、皆さん方、お一人お一人においてもですね、この点においては、俺は世界一なんやとこう言えるね、そういうものをこう目指す目標を持つべきだし、会社としても、この点に関しては、俺たちは世界一だと言えるものを持つということを目標にして、その点において努力をし続ける。まあ、そういう何かしら特色のあるですね、まあ、そういうものを持った会社にしていく。そういう特色を持った人間になる。それが個性の時代というものをですね、生き切るためのですね、非常に重要な課題であるということをぜひ知ってもらいたい。**

**この点に関しては、あいつはすごいやつやとね、言われるような、そういうものを何か一つは持たないと、人生はさみしい。何を取ってもですね、他人に劣る、あるいは、最高とは言えない、どっこいどっこいというか、そういうこういいかげんな水準だとなってくると、自分の存在感がなくなってしまいますからね。何かしら、そういう存在感をつくろうと思ったら、この点に関してはと言えるね、そういう特定の分野をつくってですね、このことは俺に任せておいてくれと言えるようなね、そういうものを早くですね、見つけて、それを早く自分のものにするということをぜひ考えてみてもらいたいですよね。私なんかでもですね、こうやってその感性のね、話をさせたら、もう私以外には誰もおらんというような、そういう状況なんですけども、哲学といっても、いろいろ哲学はあるんですけど、感性というこの原理の専門家になろうというね、そういうこの志を立ててですね、やってきたから、もう感性といえば芳村思風だということになってきてですね、感性のことを研究しようと思ったら、芳村思風が書いた本を読まないと、感性の研究に入っていけないとね、言われるような、そういう状況にこう今、なっているわけですよね。だから、全世界から、私が書いた本を買いに来てというか、注文が来て、で、全世界に感性の研究としての本が出ていってしまっている。まあ、そういうふうなこの状態なんだ。**

**で、これはそのなんでも屋にならないで、感性の、感性といえば芳村思風という、そういうこの、まあ、独特のですね、特色のある研究をしたからですね、今こうやって皆さん方にお話ができるような立場になれてるわけなんですよね。だけど、一般の大学の先生というのは、いろんなことを研究してですね、いろんなことを知ってるんですけど、何っちゅうて特徴がないんですよね。だから、あんまりしゃべれないんですね。ちゅうか、あんまり要求されない。話しに来てくれっちゅうてですね、要求されるっちゅうことはない。だけど、私の場合には、感性というものにこう特化して、そういうこの研究をしてですね、存在感をつくりましたので、感性といえば、もうあの人しかないと、そういうふうな存在感がこうつくれたんですよね。で、これからそういうこの個性のあるですね、能力を持った人が活躍する時代ですからね、もう大きな会社でも、東芝でもですね、日立でもですね、みんなどういうところに特化しようかといって、こう考えてるような、そういう時代なんですよ。なんでも屋もいらんと。これに掛けては世界一やっちゅう人が欲しいというね、そういう時代なんですよ。まあ、ぜひそのことをね、よく考えてみてもらいたいし、また皆さん方が子どもを育てる場合でもですね、そういうふうな独特の分野において才能を発揮できるという、個性を持った子どもを成長させるというような、そういうことをぜひ考えてみてもらいたいと思います。**

**で、まあ、そういう個人とか、会社のレベルではそういうことが言えるんですけどもですね、日本民族として、日本人としてどういうふうな使命というものがですね、今、この歴史から与えられておるのかっちゅうことを考えていくとですね、今とにかく、このずっと申し上げてきたようにですね、日本人は人類史上、第３の過渡期を担って活躍をしなければならないかときっちゃんである。で、この第３の過渡期というですね、近代から次の新しい時代への過渡期という、この第３の過渡期を担って、どういうふうなですね、仕事をしていったらよいのかということを考えていくと、このまずはですね、この人類が過去２回体験した、過去２回の過渡期において、その時代を担った民族がその時代にどんなことしてきたのかということを考えてみるというか、振り返ってみる。そうするとですね、この過渡期という時代を担う民族は、だいたいどういうことをしたらよいのかということが見えてくるわけですね。まあ、そこで、その第３の過渡期、近代から次の新しい時代への第３の過渡期を担って、日本人がどういうことをしたらよいのかっちゅうことを考える場合、まずは第１回目の過渡期である、古代と中世とのあいだに横たわる過渡期であるこのギリシャローマという時代をですね、振り返って、いったいそのときに、ギリシャ人はどんなことをしたのかということをですね、考えてみなければならない。**

**で、その古代の時代というのは、石の文化といわれてですね、石という素材をこの使いながらですね、文明がつくられ、発展していったという時代が、この古代という時代の特徴であります。石の文化というのは、だいたい、まあ、エジプトから始まってですね、そして、そのメソポタミア地方、中東地域に広がっていった。まあ、そういうこの文明なんですけども、だけども、石の文化というものは、この発展していった古代というですね、そのエジプトからメソポタミア地方にかけてのこの文化というのは、これは石の文化がどんどん広がっていったというですね、まあ、そういうふうな量的に拡大、発展、成長していったという、そういう段階なんですよね。だけど、ギリシャ人がやった仕事というのはですね、石の文化をもってしては、もうこれ以上、素晴らしい文化はつくれないというところまでですね、その石の文化というものをその質において発展、成長させていったというのがですね、そのギリシャ人がやった独特の仕事であります。石という素材をもってしては、もうこれ以上、素晴らしい文化はつくれない。だから、そのギリシャ人があの当時につくったですね、その大理石の彫刻とか、あるいは、石を使った建築であるパルテノン宮殿とか、ああいうものはですね、現代の建築学をもってしても、まねはできても、それを越えるものはつくれないとこういわれてるわけですよ。それほどにですね、完成度の高いものを石という素材を使って完成させたのが、そのギリシャ人の仕事だと。**

**そして、ギリシャ人たちはですね、石の文化というものをその質において、この成長させ、完成させて、もうこれ以上、素晴らしい文化は石をもってしてはつくれないというところまで持っていった。だから、ようやくですね、石の文化である古代は終わることができてですね、そして、石というものを素材としない、まったく新しい中世という時代の文化がつくられていくというですね、まあ、そういうこの状況をつくったわけであります。まあ、そのことを考えるとですね、その過渡期を担う民族が最初にしなければならない仕事というのはなんなのかといったら、その時代の文化を、その質において完成させて、その時代を終わらせるということをしなければならない。ギリシャ人というのは、古代を終わらせた民族なんだ。古代を終わらせたから、だから、古代ではない、まったく新しい時代が次にやってくるというね、そういう状況になれたのであってですね、この石の文化をもってして、より素晴らしいものがまだ考えられてるあいだは、古代は終わらないと。もうこれ以上、素晴らしいものはつくれないというところまで持っていかないと、その時代は終わらないんだということですね。**

**そして、そのギリシャ人たちは、ただ古代を終わらせるということをしただけではなくってですね、古代を終わらせると同時に、古代に代わる新しい時代を呼び起こすための原理をクリエートして、原理を創造して世界に発信した。ギリシャ人は、古代を終わらせるだけじゃなくって、古代に代わる新しい時代を呼び起こす、つくり出すための原理をつくって世界に発信した。どういう原理なのかといったらですね、真理は一つであって、本当のものは一つしかないというですね、そういう価値観を発信したんですよ。真理は一つだとか、本当のものは一つしかないというのは、そういうこの価値観というのは、それまでの人類が持っていなかった、まったく新しい価値観であった。まったく新しい価値観であったから、その真理は一つという価値観に基づいて、中世という時代がつくられていったんですね。どういうふうに中世がつくられていったのかといったらですね、真理は一つだ、本当のものは一つしかないという価値観をそのギリシャ人がつくって発信したから、どうなったかといったらですね、突然、このユダヤ教という宗教に注目が集まった。なんでかといったら、ユダヤ教だけがその当時、一神教というですね、ヤハウェの神、一神をこのあがめ奉るという、そういう宗教を持っておったのがユダヤ教であった。で、そのユダヤ教の一神教という、この宗教のあり方と、真理は一つだという、そのギリシャ人が発信した価値観とがこの合体してですね、『ガッチャマン』して、そして、そのユダヤ教が中心になってですね、あらゆる民俗宗教をこの糾合、吸収していって、そして、やがてそのユダヤ教は世界宗教としてのキリスト教に発展していく。そういう流れができていったんですね。で、キリスト教もやはり一神教ですからね、そのユダヤ教が一神教であったから、そのユダヤ教が発展して、で、キリスト教が一神教という、イエスをあがめる。そういうこの宗教になっていったわけであります。**

**まあ、そういうことを考えるとですね、過渡期を担う民族の仕事というのは２つあって、１つは、その時代の文明をその質において完成させて、その時代を終わらせるということをまずしなければならない。そして、その時代を終わらせると同時に、新しい時代をつくり出すための原理をこのつくり出して、それを世界に発信していくという仕事もしなければならない。この２つがですね、過渡期を担う民族の大きな仕事なんだというふうに、こう言うことができるわけですね。で、同様に、この第２回目の人類史上の過渡期であるですね、中世と近代とのあいだに横たわる過渡期であるルネサンスとはなんだったのかということを見ていくとですね、どういうことがわかってくるかといったら、この中世の文化というのは、これは宗教文化ですけども、この、まあ、西洋において中世というのは、紀元後３世紀から、紀元後13世紀ぐらいまでを中世といってるんですね。その1,000年間はだいたい中世というふうにいわれてるんですけども、そのあいだにですね、どんどんキリスト教は世界に広がっていきました。だけどもですね、そのキリスト教の文化というものが、本当にこう発展、成長し始めたのは、実はルネサンスに入ってからなんですよね。で、その中世1,000年間というのは、キリスト教という宗教がどんどん広がっていったんだけど、文化的にはあんまりまだ見るべきものがなかった。だけど、宗教文化としてですね、もうこれ以上、素晴らしいものはつくれないというところまで持っていったのがルネサンスの方々の仕事だった。**

**で、どういうことなのかといったら、中世1,000年間といわれる紀元後３世紀から紀元後13世紀ぐらいまではですね、そのキリスト教といっても、現在、われわれが見るようなキリスト教の教会はなかった。教会といっても、ほとんどその中世1,000年間の中ではですね、教会が洞窟の中にあったり、あるいは、その地下壕を掘って、その教会をつくったりですね、あるいは、地上にある場合でも、掘っ立て小屋か物置みたいな、本当に粗末なですね、建物があって、その上にこの十字架がこう飾ってあるような、そういう状態の教会だった。だけども、ルネサンスに入ることによってですね、突然、そのキリスト教の文化というものが、壮大な、まあ、きらびやかなですね、かたちを持ったものとして成長、発展し始めるっちゅうことになったわけであります。**

**まあ、これにはいろいろ、まあ、理由はあるんですけどもですね、まあ、理由というのは、まあ、一番大きな理由はですね、キリスト教が世界にこう広がっていくという状況になった、ちょうどそのさなかですね、610年にその中東地域にマホメットというね、宗教家が出てきて、イスラム教というこの宗教をつくった。で、そのイスラム教というのを国教とする、サラセン帝国という国家が生まれてきてですね、そして、そのサラセン帝国は、イスラム教をこの広げていくための活動というものをし始めたんですね。そのことによって、そのヨーロッパのこのキリスト教を信仰する国家と、それからイスラム教を国教とする、イスラム帝国とのあいだに衝突が起こった。そして、それまでキリスト教を信仰しておった民族や国家がですね、そのイスラム教徒の戦いに負けて、イスラム教に改宗させられてしまうというようなことになってしまったがためにですね、そういうことから、まあ、キリスト教は、自分たちを守らなければならなくなってきてですね、そして、その宗教論争が生じてきて、キリスト教の神学とイスラム教の神学が互いにこのぶつかり合って、そして、そのどちらが正しい宗教なのかというようなことを論争するような、そういうこの状況になってきた。**

**で、キリスト教はイスラム教徒の宗教論争に勝たなければならないというね、そういう状況になってきたがために、そのキリスト教の神学が哲学と関係を持ってですね、その哲学と関係を持つことによって、キリスト教のその神学が哲学化されてしまって、で、そのスコラ哲学というね、まあ、そういうこのかたちに、そのキリスト教の神学がなってしまったんですね。で、そのキリスト教の神学が哲学と関係を持って、スコラ哲学という体系性を持った神学になってしまった。その体系性を持った神学のこの内容を建築によって表現したものが、実はあの壮大なキリスト教の教会なんですよ。なんでああいうこの壮大な構図を持ったですね、そのキリスト教の教会ができたのか。あれは、そのキリスト教の神学を建築で表現したものなんだ。建築というのは、ある意味で、この人間のこの考え方や価値観の表現というね、まあ、そういうふうなところがあります。どういうふうな、その思いをその建築のかたちや構造の中に込めるか。そのことによって、建築がどういうかたちになってくるかが決まるわけですね。建築というのは人間の思いの表現なんですよ。いわゆる、まあ、その建築というのは、設計図をつくりますけどね、設計というのは、建築思想の表現ですからね。だから、その建築は民族によってね、家のかたちが違いますしね、またその素材も違ってきますし、いろんなその違いが、風土や民族の違いによって建築の違いは生まれてきます。**

**まあ、こういうこともやっぱり、これからですね、世界に羽ばたく建築会社になっていこうと思ったら、まあ、そういうことも考えてですね、その民族が納得できるこのデザイン、表現、かたちを持った建築のあり方というものを提案していく力をですね、この建築会社は持たなければ、世界には広がっていきません。また、これまである建築ではない、まったく新しいこの建築様式というものもですね、つくり出していくということもですね、建築会社の仕事として考えなければならないんですよね。そうしないと、建築業界における歴史がつくれませんからね。今ある建築で満足しておったらいかんと。今ある建築よりもっと素晴らしい建築、もっとこの時代が要求する、このものに合った家のかたちというものを追求していくというね、かたちで、どんどん、どんどん、建築は人間の思いをかたちにしていく。まあ、そういうこの仕事をですね、していかなければならないわけであります。**

**とにかく、そのキリスト教の教会がなんであんなかたちになったのか。あれは、その神学が哲学的体系を持って、その神学体系をかたちに表現しようとしたものが、ああいう構造になってしまったっちゅうことですね。まあ、それほど建築というものはですね、思想と深い関係があります。だから、有名な建築会社は、ほとんど皆、哲学者ですよ。選挙にね、東京都の選挙に出て話題になってる黒川紀章さんでもね、いろんな世界中にたくさんあの方のデザインによる建築ができましたけどね、本当にこの黒川紀章さんをしゃべらせたらね、哲学者かと思うぐらいね、まあ、深いね、思想的なことをおっしゃいますよ。だから、本当にこう建築学者という、建築家というのは思想家なんですよ。いわゆる建築は思想の表現、人間の理想とか、思いの表現なんですよね。まあ、そういうことでですね、ルネサンスという時代になって、初めてそういうこの神学と哲学が合体して、スコラ哲学というのができて、そのスコラ哲学の神学大系を表現したものとして、キリスト教の建築がつくられて、そして、その有名な宗教芸術家といわれるような、ラファエロとか、ミケランジェロというような方々がですね、その教会を完成させ、教会を彩るためにさまざまなこの関わり方をしてですね、そして、今日、残ってるような、崇高なこのイメージを持った教会というのが、まあ、できてきたわけであります。**

**まあ、そういうことを考えると、ルネサンスの人々というのはですね、この宗教文化としては、もうこれ以上、素晴らしい宗教文化はつくれないというところまで持っていったのが、ルネサンスの人々のこの活動であった。だから、ルネサンスの時代につくられた教会建築とか、あるいは、ルネサンスの時代につくられた絵画なんかはですね、みんな宗教的な内容を表現した絵画なんですけど、もう今の画家でもですね、まねはできても、宗教家としてあれ以上、素晴らしいものはつくれないというね、そういうこの完成度の高い絵がですね、あの時代に、ルネサンスの時代につくられました。で、われわれが今、ヨーロッパに行ってですね、感動して帰ってくるのは、まさにその、もうこれ以上、素晴らしいものはつくれないというところまで持っていったルネサンスの人々のですね、残した文化遺産をわれわれが眺めてきて、ヨーロッパはいいなっちゅうて帰ってくるんですよね。だから、まあ、ヨーロッパには未来はない。過去しかない。過去の素晴らしさに酔ってるというね、まあ、そういう状況で、ヨーロッパはもう未来をつくるための指導者になれない。これからアジアだと。で、そういうことで、ルネサンスの人々はですね、その中世という時代の宗教文化というものを、その質において完成させて、中世を終わらせたというのがですね、このルネサンスの人々の活動であった。**

**で、ルネサンスの人々は、中世という宗教の時代を終わらせたと同時にですね、その宗教の時代である中世とはまったく違う新しい時代をつくり出すために必要な原理を発信したんですね。どういう原理を発信したのかといったら、人間の本質は理性であって、人間の持ってる能力の中で理性しか信頼できるものはない。まあ、そういうこの考え方を発信した。だから、近代は理性の時代になってしまったんですね。そして、その理性の時代というものはどういうふうに進んでいったのかといったらですね、その理性の時代というものが、今、見るように、科学技術文明というものをつくり出してですね、そのあらゆるものを理性的に考えて、処理して、合理的に対応するというね、まあ、そういうふうなこの文明である科学技術文明というのをつくり出しました。そして、今、われわれは、その科学技術文明の恩恵を受けてですね、生きてるわけなんですけども、じゃあ、このわれわれは、第３の過渡期を担う民族としてどういうことをするべきなのか。まあ、基本的にはですね、第３の過渡期を担う日本人は、この第２のギリシャ人になり、第２のルネサンス人にならなければならない。まあ、そういうこの課題がまずはあるわけであります。**

**で、過渡期というとですね、なんとなく中途半端な時代だとこうイメージするかもしれませんけど、だけど、過去を振り返ればね、過渡期こそ、最も素晴らしい時代だった。古代の時代、中世の時代という、そういうこの時代の真っただ中よりもですね、過渡期に入ったときに文明は爛熟してですね、最も素晴らしい完成度の高い状態になるんだっちゅうことですね。その意味において、われわれ日本人は、第３の過渡期を担うっちゅうことはですね、これから過去の、ギリシャ人がつくったような、あるいはルネサンス人がつくったような、完成度の高い文明をですね、日本人はこれからつくり出さなければならないんだというように言うことができるわけですね。じゃあ、その内容はいったいなんなのかといったらですね、近代の文明は科学技術文明ですから、まずわれわれがしなきゃならん仕事とはどういうことなのかといったらですね、まずはわれわれは、科学技術文明をその質において完成してですね、そして、近代を終わらせるという仕事をですね、日本人がセントバーナードなんですね。せんといかん、セントバーナードね。せんといかん。まずはね。近代、科学技術文明をその質において完成させてですね、そして、理性の時代である近代を終わらせるという仕事をね、セントバーナード。**

**で、もう１つは何か。もう１つはですね、近代を終わらせると同時に、この近代に代わる新しい時代をつくり出すための原理をつくり出して、それを世界に発信するということをしなきゃならん。近代に代わる新しい時代をクリエートする、創造するための原理をこのつくって世界に発信する。この２つのことをこれから日本人は、世界に先駆けてやってしまわなければ、次の新しい時代はやってこないということですね。日本人がその仕事をしないと、中国の方々が新しい時代をつくる場合にどういう時代をつくっていいのかわからない。日本人は、この第３の過渡期を担う民族なんですけども、次の新しい時代をつくるのは中国人の方々なんですよ。次の新しい時代を完成するのはインド人の方々なんですよ。日本人は新しい時代をつくるんじゃなくって、第３の過渡期を担う民族なの。かときっちゃんなんですよ。で、そのかときっちゃんの仕事が２つあってですね、第１番目は、近代科学技術文明をその質において完成させて、もう科学技術文明としてはこれ以上、素晴らしい文明はありませんっちゅうところまでですね、日本人が持っていくんですね。もうこれ以上、素晴らしいものはないっちゅうところまで文明はいかないと、その文明は終わらないんですよ。まだ素晴らしいものが考えられておったら、まだ文明は続くわけですからね。もうこれ以上、素晴らしいものはない。そこまで持っていくのが日本人なんだ。**

**なんで日本人は科学技術文明を完成させることができるのか。それはですね、この日本人のこの民族使命というのはいったいなんなのか。日本人は、科学技術をもって国是と成す。技術立国というものを標榜しておる唯一の国家だ。で、この技術立国を標榜しですね、技術大国を目指すという、この日本民族のですね、この独特の能力というものを天は見抜いてですね、そして、日本人にこの科学技術文明をその質において完成させて、そして、近代を終わらせるという、そういう使命を天は日本に与えたんだ。技術をもって国土と成し、技術立国を標榜しておる国家の上にですね、科学技術文明をその質において完成させるという使命が与えられてる。これは豈偶然ならんや、偶然ではない。まさに絶妙なる歴史のタイミングだというふうにね、言わなければならない。これは神仏、天意を、天の意志ですね。天意をもってしてしか、こういうこのグッドタイミングはね、つくれない。技術をもって国土と成すという国家の上にですね、科学技術文明を完成させるという使命がやってきてる。これ以上、グッドタイミングはないですからね。絶妙なタイミングだ。これこそまさに天から日本人に与えられた使命だというふうにね、言わなければならない。**

**じゃあ、なんで日本人は、この科学技術文明を、もうこれ以上、素晴らしいものはないっちゅうところまでですね、発展させることができて、科学技術文明を完成させるというような力を持ってると言えるのか。それは日本民族のですね、他の民族にない独特のこの素晴らしさ、特徴とはいったいなんなのかといったら、日本民族は、過去を振り返ってもですね、常にあらゆるものを最高の完成度に仕上げてしまわないと、気が済まんという民族なんですよ。どういうことなのかといったらですね、その日本の古代である奈良時代はですね、その韓国、朝鮮半島からいろんなものが入ってきました。だけども、日本人は、その外国から素晴らしいものを学ぶんですけどね、学んだものを学んだだけで受け入れるというだけでは終わらない。日本人は。受け入れたものをね、さらにですね、それに磨きを掛けてですね、その受け入れたときよりもっと素晴らしいものをつくってしまうというね、そういう仕事をするのがね、日本人だ。だから、朝鮮半島から入ってきたさまざまな芸術や文化をですね、日本人はどうしたかといったら、それに日本人独特の繊細な感性、繊細な感性というものをもってですね、その入ってきたものをさらに完成度の高いものに仕上げて、そして、白鳳、天平の文化というね、まさに芸術といわれるようなね、そういう高度なですね、文化をつくり出しました。**

**で、これをまあ、歴史学的には国風化といってですね、外から入ってきたものを日本化にしてしまう。国風化してしまうと言うんですけど、この国風化というのはどういうことなのかといったら、日本人は独特の感性を持っておる。しかも、世界に誇る繊細な感性を持っておる。この繊細な感性というものはね、繊細な感性というものが、あらゆるものをコンパクトにちっちゃくしてしまってですね、持ち運びできるようにしてしまうという、この力に関係してるんですよ。繊細な感性。だから、ナノミクロンというのは、そういう微細な単位でのですね、仕事は独壇場、得意中の得意なんだ。平安時代でもですね、中国からいろんなものが入ってきましたよね。中国から入ってきた寝殿造というのは、本当に粗野なものだったんです。それを日本人は繊細な感性で磨き上げて、芸術作品といわれるようなね、その寝殿造をつくった。それから、また鎌倉時代なんかではですね、朝鮮半島や中国から入ってきた仏像は単に信仰の対象としての仏像で、非常に粗野な、荒削りなものだったんですけどね、鎌倉時代になってくると、その日本には仏師といわれるね、運慶、快慶といわれるような、非常にその優れた芸術的才能を持った仏師が出てきてですね、その信仰の対象を越えた芸術作品としてのね、仏様をたくさんつくりました。外からいいものを学ぶんですけど、それだけではね、納得できない、日本人はね。それにさらに磨きを掛けて、もうこれ以上素晴らしいものはできんちゅうところに持っていかないと、納得しないのが日本人の感性、精神性なんですね。**

**だから、鎌倉時代に入ると、仏教でもね、日本仏教というね、独特の繊細な表現を持ったね、仏教の経典がたくさんつくられました。法然、親鸞ね、道元、日蓮、一遍、いろんな独特のですね、この仏教解釈をしたね、まあ、そういうこの僧侶がたくさん出てきました。刀なんかでもですね、刀なんかでも、普通は人を斬るための刀なんです。だけど、そういうものを芸術作品に日本人はしてしまって、正宗の名刀っちゅってですね、その独特の刃形と独特の反りを持ったですね、その鋼の鍛え方をして、人を斬るための刀を超えてですね、鞘を払ってぱっとこう立ててですね、それを眺めて見るだけで心が洗われるというようなね、その刀を見ることによって人間性が鍛えられるというような、そういうこの芸術作品としての刀をつくった。これはもう世界に類を見ないですね、この素晴らしい仕事だった。建築なんかでもですね、その鎌倉時代に入ると、書院造といってですね、本当にこう簡素な美学といわれる、もうこれ以上、単純化できない。本当にもう自然と人間と建物が一体化したようなですね、本当にこう、そのエッセンスだけを、エッセンスだけをこの抜き出したようなですね、簡素な美学といわれる、その書院造という建物をつくった。まあ、これは将来、その茶室になって発展していったりするんですけども、そういうふうなですね、日本人というのは、どんなものでもね、もうこれ以上、その完成度の高いものはないというところまで持っていてしまうというのがね、日本人のこの精神性の特徴なんですよね。**

**であるが故に、この科学技術文明もね、日本人しかですね、もうこれ以上、科学技術文明において素晴らしいものはないというところまで持っていけない。日本人しかそれはできないということをね、言えるわけであります。実際問題、この家電なんかでもね、携帯電話でもそうですけど、とにかく日本製は品質がいいと。信頼できるっちゅうんでね、全世界から日本製のものを買いたいという、そういうこの要望がありましてですね、自動車なんかでもですね、日本製の自動車は中古車でも故障が少ない。もう10年たってるのにね、それを外国の人はありがたがって買ってるっちゅうような感じでですね、それほどに完成度の高いですね、ものをつくれるのが日本人の特徴であります。そういうことを考えればね、科学技術文明というものを、もうこれ以上、素晴らしい科学技術文明はないというところまで持っていける。科学技術文明をその質において完成させて、近代を終わらせるという仕事ができるのは日本人だけだというふうにですね、考えなければなりません。**

**じゃあ、いったいその科学技術文明を完成させて終わらせるというのは、どういう仕事なのかといったらですね、これまでのですね、科学技術文明の発展というのは、科学技術というこの文化がですね、全世界に広がっていった。量的に拡大していったという、そういうこの段階のですね、科学技術が今日の科学技術なんですよ。今日の科学技術でもですね、人類としては、これはすごいこの文明だとこう思ってらっしゃる方も多いと思うんですけど、だけども、この全体、科学技術文明の全体から見るならばですね、今日のわれわれが持ってる科学技術文明というのは、科学技術が量的に発展、拡大していった、そういう段階なものであってですね、その意味では、現代の科学技術というものはですね、科学技術が量的に発展していくことによって、人類への罪といわれるものを残しておる。これは自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物、これが科学の罪といわれるものである。こういうこの自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物という、この科学の罪といわれるような問題点、欠点を持ってるあいだは、科学技術文明はまだ完成されていない。そこで、これから日本人がですね、それを仕事である科学技術文明をその質において完成させて終わらせるという仕事はどういうことなのかといったら、科学技術文明が量的に全地球上に拡大、発展、成長していくプロセスの中で、科学が人類に及ぼした罪である、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物、この科学の罪をどう償うかということがですね、日本人がこれから背負っていかなければならない大きな仕事なんですよ。**

**で、科学がこの科学の罪を持ってるあいだは、科学技術文明はまだ半端な文明なんだ。この科学技術文明が、その罪をこの償ってですね、そして、その自然を破壊しない、環境を破壊しない、人間性を破壊しない、人間性を成長させる。そして、この核廃棄物が持っておる放射能への不安というものを一掃する。そういうことがちゃんとできて初めて科学技術文明はこのもうこれ以上、素晴らしい文明はないというところまで、この到達することができるわけですね。そういう仕事をですね、この人類の中心になって、自分の仕事としてやっていかなければならないというのがですね、これからの日本人の仕事であります。それをどう言うかといったら、科学技術文明をその質において完成させて近代を終わらせる。これが日本人のこれからの仕事だというんですね。言わなければならない。**

**で、その仕事の中には何があるかといったら、この自然破壊というものを乗り越える。また環境破壊というものを乗り越える。そのためにはどんなことを、そのためにどんなことをセントバーナードかというとですね、この自然破壊、環境破壊というものを乗り越えていこうと思ったら、５つのことをセントバーナードなんだ。５つのことをせんといかん。５つのことというのはどういうことなのかといったらですね、これからわれわれは、まあ、これからっちゅうか、もうすでに始まってるんですけども、どういうことをセントバーナードかね、どういうことをせんといかんかっちゅったらですね、まずは、この環境を破壊しない技術。環境を破壊しない技術、環境を守る技術、環境を補修する技術、環境をクリエートする、環境を創造する技術ね。そして、最終的には全産業の有機的リサイクルシステムの完成。この５つのことをやらないと、環境破壊と自然破壊を完全にクリアすることはできないんですね。自然破壊、環境破壊というものを乗り越えて、科学技術文明を完成させようと思ったら、環境を破壊しない技術、環境を守る技術、環境を補修する技術、環境をつくり出す技術、そして、全産業の有機的リサイクルシステムの完成。**

**全産業の有機的リサイクルシステムの完成というのはどういうことなのかといったらですね、ある産業から廃棄される廃棄物が次の産業の原料になり、またその産業から廃棄される廃棄物が次の産業の原料になるというふうに、全産業が有機的に絡み合ってですね、完全に廃棄物を出さないというね、そういう産業社会をつくるということがですね、この環境保全ということをですね、考える場合の究極の理想なんですよ。で、もうすでに人類はですね、環境を破壊しない技術を持ってる。環境を守る技術を持ってる。環境を補修する技術を持ってる。環境をつくる技術を持ってるんですよ。すなわち、砂漠を緑化するとかですね、月や火星を地球と同じような空気を持った環境にしてしまうということも実験室では可能なんですよね。これはでき上がってるんだ。あと１つ、まだ全然、気が付いてないのは、全産業の有機的リサイクルシステムの完成ということがまだできてない。誰もそれをしようとしてない。で、これをちゃんとやってしまわないと、中国の方々がですね、この激しく生産カットをし始めたら、たちまちにしてですね、地球はこの生きていけないような空気になってしまう。早くこの全産業を有機的にこの結び付けてですね、完全に廃棄物を出さないという、そういうシステムを産業システムとしてつくり出さなければならない。これが完全な環境対策なんですよ。だから、そういうこの全産業を結び付けていってですね、廃棄物を完全に出さないこの産業社会をつくるということが、まだ意識すらないというね、そういう状態なんですよ。**

**だけど、これからの時代はですね、統合の時代といって、あらゆるものを結び付けていってですね、そして、そのつながりをつくっていくという、そういう時代がこの統合の時代といわれる時代ですので、必ずやその全産業社会がつながってですね、有機的にこの結び付いていくということがどっかで気付かれる。どっかでそのことに気付いてですね、そのことが計画されていくはずであります。今は統合という言葉がキーワードになって時代が動いてるんですから、全産業社会が統合化されていってですね、有機化されていって、廃棄物を出さないという、そういう完全な資源の有効利用ということがですね、実現されるような状況に近づいていくはずであります。これも誰がやるんやと言ったら、日本人がやらないかん。まあ、そうするためには、化学、このケミカルのね、そういうこの力がですね、要求されてくる分野だ。ケミカルというのはソフトの分野ですからね、これは日本人の独壇場なんですよ。環境問題において、ハードな部分はね、ドイツが非常に優れておるといわれてますけど、これからハードじゃなくて、ソフトの部分に重点が移っていきますので、ソフトの部分におけるこの環境技術料は日本の独壇場であります。そのことを考えてもですね、この日本人のこれからの使命は非常に大きなものがある。人類に貢献できる、非常に大きなものがある。**

**自然破壊、環境破壊というのは、そういうかたちで乗り越えられていくんですけど、次は人間性の破壊ね。離婚の激増を食い止める、幼児の虐待を防ぐ、高齢者への虐待をなくす。そして、考え方の違う人と一緒に生きていける。宗教が違っても一緒に生きていけるという、この人類の人間性をつくるということもですね、日本人がしなければならない。それも日本人にしかできない大仕事なんだ。なぜならば、日本人しか、宗教が違っても殺し合ってはいないという、その民族はいない。他の宗教を排除してですね、宗教的に統一するという、そういうふうなことはしていない。ヨーロッパ人でもですね、キリスト教の信仰を持っておりますから、イスラム教の信仰を持ってる人を排除しますよね。日本人はそんなことはしてません。日本人の中にも、イスラム教の信仰を持ってる人もおりますし、仏教の人もおりますし、キリスト教の人もおりますし、また、この東南アジアのね、そのジャワ島とか、ジャイナ教とかね、いろんな宗教を持ってる人もいらっしゃる。だけども、全然、殺し合っていません。考え方が違い、宗教が違い、感じ方が違っても、共に生きていけるというね、そういうこの人間性をつくっていかないと、これからの人類は平和には生きていけません。**

**離婚の激増を食い止めようと思ったら、考え方が違っても、考え方の違う人と仲よく生きていけるという力が必要なんですよ。今の日本人はね、欧米化されてますからね、だから、欧米と同じようにですね、考え方が違うからやっていけへん、価値観が違うから一緒に仕事はできないっちゅってですね、欧米と同じようにやってますけど、だけど、日本人が持っておる伝統文化はそんなもんじゃありません。日本人は生活の中ではね、考え方が違っても、性格が違っても、みんなと仲よく生きていくというような、そういうことがかつてできてきた民族ですからね。だから、世界からそういうこの離婚をなくしてですね、幼児の虐待をなくし、高齢者の虐待をなくす。日本が世界最高の高齢化社会なんですからね。だから、高齢者とともに生きるという社会をつくっていく。模範を日本人は示して、世界に教えなければならない。まあ、そういうこの使命もですね、社会のあり方として日本人は担う必要があります。**

**そういうふうに人間性の破壊というふうにいわれてるですね、離婚の激増、幼児の虐待を食い止めるのも日本人の仕事なんですよ。日本人にしかできない仕事なんですよ。だから、その私の考え方からするならばですね、あのどこまで続くかもわからないパレスチナとイスラエルのですね、あの不毛な戦争に最後に終止符を打って、パレスチナ人とイスラエル人が共に助け合いながら、協力し合いながら生きるという関係性に導いてあげることができるのは日本人だけだというふうにですね、私は考えております。かつて、あのイスラエルとパレスチナの戦争は、アメリカのキッシンジャーさんによって調停されたこともあったしね。また国連の事務総長によって調停されたことはあったんですけど、だけども、あれは妥協という仕方でですね、調停されたので、この妥協っちゅうのは、お互いに不満を残し合いながらの、この歩み寄りですのでね、必ず不満がまた再燃して、また戦争になってしまう。そうじゃなくって、本当にこの妥協じゃなくって、お互いに力を合わせて、協力し合って生きていくという関係性に持っていってあげて、このお互いがそのより成長していくというふうなですね、かたちに持っていってあげることができるのは日本人だけだ。日本人はそのことを過去、やってきたんですよね。外国からいろんなものを学んで、で、学んだものをさらに自分の力で成長させていって自分のものにしていく。**

**そういう仕方で日本人は、かつては韓国の人たちを尊敬し、また中国の人たちを尊敬し、また欧米人を尊敬して今日までやってきた。自分とは違うものを取り入れて、自分を成長させて、相手にありがとうと言える。この力がなかったならば、戦争はなくなりませんよ。離婚はなくなりませんよ。幼児の虐待も防げませんよ。自分の言うことを自分の子どもが聞かんからって、むかつくっちゅうてですね、しつけのつもりで言うことを聞かそうとしてるようじゃね、虐待はなくならない。子どもというのは、歴史をつくるために生まれてくるんだ。歴史をつくろうと思ったら、いつまでもその親の言うことを聞いとったらいかん。いつまでも先生の言うことを聞いとったらいかん。歴史をつくろうと思ったら、今まで誰もやったことないことをせんといかんのですからね。親の言うことを聞いとったら、歴史はつくれませんよ。親の言うことに反発して、俺はそう思わん。俺はそんなもの欲しくない。反抗することによってしかですね、その歴史はつくれない。だから、子どもというのは、第１反抗期、第２反抗期というものを生まれながらに命にプログラムされて生まれてくるんだ。反抗しなきゃ、自分を確立できない。それが命なんだ。**

**だから、本当の人間教育というのは、反抗をさせながら、反抗を許しながら、反抗を使って人間を育てていく。そうしないと、その子らしい個性のある子はできないんだ。そのことをちゃんと知っていないとですね、人間教育はできません。子どもに従順さと素直さだけを要求して、反抗する子は悪い子だと言っとったら、それは歴史がつくれない。子どもに本来のこの生まれてきたですね、使命を果たすことができないように子どもをさせてしまう。そういうことになってしまう。それは子どもを殺すことだ。子どもを、この従順で素直な子どもにしようとすることは子どもを殺すことだ。その子がその子らしくなることを否定してるんだ。妨げてるんだ。だから、子どもはそれに反発してですね、その学校を遠ざかり、親とけんかしてしまう。そういう意味でもですね、その子どもを本当に個性の時代に合ったようなですね、その子らしい個性を持った子に成長させようと思ったら、反抗を恐れてはならない。反抗を恐れては教育ができない。反抗させながら、そういうふうに考えてるのか。そういうふうに考えてるんだったら、この本を読んでみたらどうや。こういう人に会ってみたらどうやと言ってですね、親の思うように子どもを育てようとしないで、その子が思うようにこの成長していくための手助け、助けをしてあげるというのがですね、親の関わり方であります。そうしないと、子どもは真っすぐに伸びないんですね。それが親の愛だ。で、そういうこの考え方が違っても、感じ方が違っても、一緒にやっていけるという、そういうふうな生き方というのは、日本人しか教えられないんですよ。それは日本の伝統文化の中にその力が秘められておるわけですからね。**

**で、この近代科学の罪の最後は、核廃棄物ですよね。核廃棄物っちゅうのは、放射能への不安というものがあるがために、核廃棄物はどう処理したらいいのかわからないというね。そういう状況で今、人類は悩んでおります。核廃棄物をこの宇宙に捨てに行ったりですね、あるいは地中深く埋めてしまったりなんかして、なかなかその廃棄物をどう処理するかということが、なかなか今、まだできていない。それを責任を持ってですね、放射能への不安を一層して、核エネルギーというものを安心して人類が使いこなせるようなエネルギーにする。これもやっぱり、日本人の使命なんですよ。なぜかといったら、この核の悲惨さをですね、体験させられた日本人が、この核の悲惨さ、核が持ってる不安から人類を救うという仕事をしなければならない。そのために天は日本の国土の上に２回もご丁寧に原子爆弾を落とすという事実をつくったんだ。君たちがその仕事を担って、人類にこの核エネルギーをですね、安心に使えるような、そういう状況に人類をしていく。その仕事を君たちはせんないかんのだぞということをですね、この天が日本人に託した。それがこの原爆が２回も落とされたということのですね、意味であります。**

**そういう意味では、この核廃棄物を処理する方法も日本人が考えなければならない。だから、広島か長崎にですね、核廃棄物を処理する大研究センターをつくってですね、そして、その放射能への不安をなく、恐れることなく、核を平和に使いこなせるですね、そういう技術を日本人はつくって、世界に教えなければならない。そういう仕事がですね、この日本人には課せられておるわけであります。それともう１つは、この近代に代わる新しい時代をつくり出すための原理をつくって世界に発信する。そういうこともしなければならない。そして、次の新しい時代は感性だということになればですね、この感性論哲学というものがですね、次の時代をつくり出していく根本原理だということに、まあ、なってくるわけなんですよね。心の時代、感性の時代というものをこの教えることができるのも、日本人だけだ。日本人は感性民族だ。日本人は心の民族だといわれております。そういう意味で、これからわれわれがですね、このやっていかなければならない、21世紀の使命というのは、非常に人類史的にですね、重いというかですね、非常にこの価値のある、大事な仕事がたくさん課せられております。そういう仕事を担っていける子どもたちをわれわれはこれから育てなければならないし、われわれ自身もですね、そういう多くの仕事の中のどれを、俺はどういうことに関わって、俺の人生をつくっていこうか。まあ、そういうこともですね、考えてほしいと思うわけですね。**

**まあ、とにかく当面は、この今、自分がやってる仕事の中でですね、俺はこれに掛けては世界一や。そういうふうに言えるようなものをですね、早く何か一つは自分のものにしてもらいたい。それを自分の成長の目標としてですね、まず仕事をしてもらいたいと思います。何か一つでいいからね、さすがですねと言ってもらえるものをまず自分のものとして持ってもらいたいと。それが自分の存在感であり、それが自分の価値をつくり出すですね、そういうこのきっかけになっていきますのでね、ぜひそういう努力の仕方を考えてみてもらいたいと思います。ということで、今日の21世紀における日本人の使命という話を終わります。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**